特205
821

國民精神總動員に鑑み山岳宗教の普及と吾妻連峯の開發を提唱す

始

特205
827

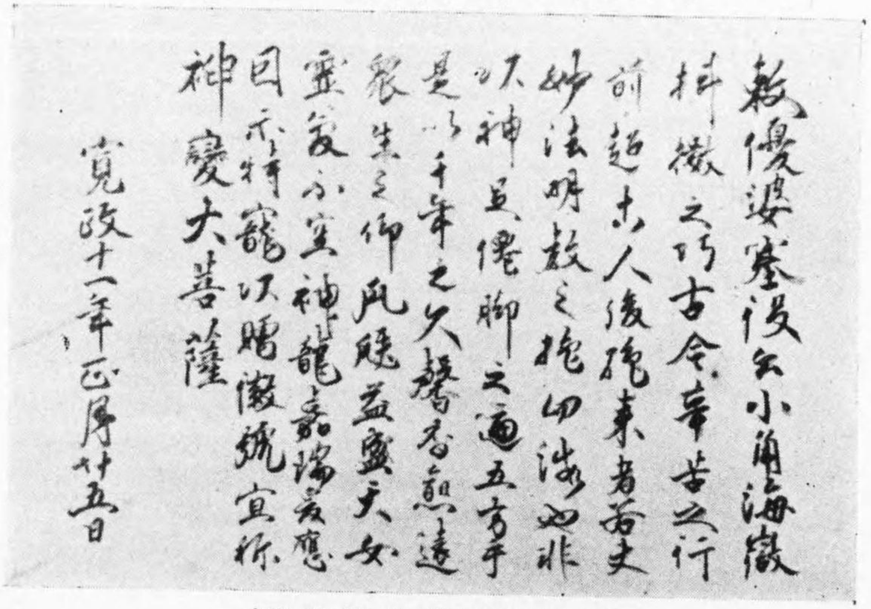
國民精神總動員に鑑み

山岳宗教の普及と吾妻

連峯の開發を提唱す

帝國圖書館藏
昭和十三年

光格天皇宸翰謚號勅書（國寶）



（大本山聖護院門跡藏）

吾妻山谷地平白鳳寺遺跡ニテ

（記念撮影）

吾妻大權現祈願表白

諸願三礼

維天保七丙申年六月吉旦祈禱善根之砌奉轉讀大般若
經六百軸直久　吾妻山大權現滿山護法善神奉供養

又以吾妻山有胎金兩部無作本有淨刹大毘盧遮那大日如来
金剛部三神也山形八葉奥羽二州跨日城鎮護國家護持
神崛也別而會陽鬼門亀鶴兩城鎮護之勝地也日本武尊依
縁言山名也東南西北中五部五智円満淨刹山河大地全遍那真林
嶺嵐谷響自法身説法三部諸尊濟々羅列無數聖衆奇々
妙翼爾則本有色聲顕見聞法爾境智絶百空既知法爾自
然曼荼三蜜瑜伽灵場也是以白鳳年中高祖神変大开開闢
修驗國峯号魚麗降伏歓喜踊躍爰當願明王絶王等不氣候
郡中貴賤峯而發信心奉祈願吾妻山大權現滿山護法善神傳燈
正年行事錦信法印抽丹誠一七日祖師傳々修初法一派大衆結集大般若
経六百軸真文轉讀仁王護國般若経三百軸真讀奉祈天氣快晴氣候
順時五穀成就誠作毛不熟民不忘公恩以何其真備珠當郡街
沢流未別而水源寺護灵場除暴風雨五穀成就奉乞寺護万民訓
渇除患王雖宿善拙願望速令成就給
然則上天下界龍神八部兩部界會諸尊聖衆日城第一天照大神
能野三所大權現金剛藏王胎藏權現七大八大金剛童子別而吾妻山大權
現大日大聖不動明王大鳥越天女十五王子大星天神毘沙門天王吒枳尼天
稲荷大明神三宝大荒神大聖歓喜天怨而滿山護法善神般若守
護十二善神法華鎮護四天天王乃至日本国中六十余州大小神祇二十
八万部頭眷屬末鉢影向哀愍恐縱受無二信心智見祈願一々
成就円満玉殺百百拜　敬白

天保七丙申年六月吉日

（渡利村八幡院藏）

口繪の説明

光格天皇宸翰謚號勅書

勅す。役公優婆塞は、海嶽抖擻の巧、古今辛苦の行、前は古人に超え、後は來者を絶す。若し夫れ妙法明敎の四海に施くや、神足僊脚の五方に遍きを以てするに非ずや。是を以て千年の久しく、馨香愈遠く、衆生の仰ぐ、瓜瓜益盛なり。天女の靈夢空しからず、神龍の嘉瑞爰に應ず。因て特寵を示して、以て徽號を贈る、宜しく神變大菩薩と稱すべし。

【説明】 悉しき解説は、はぶきますが、この勅書は國寶となつて京都大本山聖護院に保存せられてをるのであります。古來菩薩號を戴いた高僧碩學は極めて尠く、行基菩薩、興正菩薩、忍性菩薩、大悲菩薩など史實に傳つてはをるが何れも御沙汰書たる勅書の殘存するものは一つもなく、唯此の神變大菩薩號一本のみであります。亦大師、禪師、國師號の勅賜された史實も多々あるが、これも勅書の現存するもの極めて少數で而かもその少數の勅書も大内記の筆になるもので、天皇の御宸筆は畫日と云つて僅に日附を御記入になつてゐるにすぎないのでありますが、此の神變大菩薩號の勅謚の御沙汰丈けは全文悉く 光格天皇の御宸筆でありまして、これ修驗道の開祖たる役公の全人格を御瞻仰あらせられた結果と拜察せられ、聖鑑叡明たゞ〳〵畏き極みと存じます。

吾妻大權現祈願表白

維れ天保七丙申年六月吉旦、祈禱善根の砌大般若經六百軸の眞文を轉讀し奉り、吾妻山大權現滿山護法善神に供養し奉る。

夫れ以れば吾妻山とイツパ胎金兩部、無作本有の淨刹、大毘盧遮那大日如來の垂跡、報法應の三神なり。山の形八葉にして奥羽二州に跨り、日域鎭護、國家護持の神嶺なり。別して會陽の鬼門、龜鶴兩城鎭護之勝地なり。日本武尊の緣言に依て山名となすなり。東南西北中の五部は五智圓滿の淨刹、山河大地は全く遮那の

直躰にして嶺嵐谷響は自ら法身の說法なり。三部の諸尊は濟々として羅列し無數の聖衆は奇々として安座せり。爾れば則ち本有の色聲は見聞に顯れ、法爾の境智は有空を絕す。既に知んぬ法爾自然の曼荼、三密瑜伽の靈場なるをや。是を以て白鳳年中高祖神變大菩薩開闢し玉へしよりこのかた修驗國峯と號す。衆魔降伏、歡喜踊躍す。爰に當願望の施主等、不氣候に付郡中の貴賤擧つて信心を發し、吾妻山大權現滿山護法善神へ誓願し奉り傳燈正年行事諦信法印丹誠を抽じ一七日の間祖師傳々の秘法を修し一派の大衆結集して大般若經六百軸の眞文を轉讀し且つ仁王護國般若經三百餘部をも眞讀し、天氣快晴、氣候順時、五穀成就を祈り奉る。誠に作毛不熟なれば民公恩を忘れずと雖も何を以てか其貢を備へん。殊に當郡は御澤の流末にあり、別して吾妻山は水源守護の靈場なれば惡風雨を除き五穀成就の守護を乞ひ奉る。仰ぎ願くは萬民飢渴の患ひを除き玉へ。宿善拙しと雖も願望速に成就せしめ給へ。

然れば則ち上天下界の龍神八部、兩部界會諸尊聖衆、日域第一天照大神、熊野三所大權現、金剛藏王胎藏權現、七大八大金剛童子、別して吾妻山大權現、六日大聖不動明王、大辯財天女十五王子、大黑天神、毘沙門天王、吒枳尼天、稻荷大明神、三寶大荒神、大聖歡喜天總じて滿山護法善神、般若守護十六善神、法華鎭護四大天王乃至日本國中六十餘州の大小の神祇、三千八萬部類眷屬、來臨影向して哀愍納受し無二の信心を智見し祈願一々成就圓滿せしめ玉へ　稽首百拜敬て白す。

【說明】この祈願の表白は說明するまでもなく、天保七年六月晴天回復祈願のため山伏の一地方に於ける頭領たる諦信法印導師となり、七日間大般若轉讀並に仁王經眞讀の法會を催し吾妻大權現に祈つた時分の開白の祈願文であります。

吾妻山中谷地平白鳳寺遺跡

【說明】この紀念撮影は昭和十年八月述者主催を以て吾妻開山修驗高祖神變大菩薩誕生千三百年記念慶讃のため、山麓特設境場に於て採燈大護摩供を奉修し寶祚無窮、國威宣揚を祈り奉り同志を引卒して吾妻修行を勸めました砌谷地平にて記念に撮影したものであります。

はしがき

吾妻連峯と磐梯山を結んだ領域は近代的に公園地として觀るも、確に非凡な景觀を有つてをる東北の名山であります。

一般登山者を以て賑つてをる磐梯山や一切經方面は、山容峨々として兀々たる火山特有の姿態と雄渾な山頂の風光、又は猪苗代湖水や信達の平野を一眸に瞰下する濶達たる眺望に高山としての特色は勿論あるが、雄大なる南宋畫の繪卷物を繰りひろげられたやうな秀麗幽邃な仙境や、莊嚴凄絕な神秘境は東中西の所謂吾妻三山乃至東西兩大嶺と裏磐梯にあるのであります。

或は跑ひ、或は攀ぢなければならぬ巖崛絕壁の嶮岨、或は倒れたる大木をくゞり、或は岩角をまわり、攀ぢ上り攀ぢ下る千古斧鉞を加へない原始林の難道、はては裏磐梯に於ける五百にも餘るといはれる大小湖沼の偉觀、六十餘丈の高さを筆頭とする十有六七の中津川溪谷飛瀑の絕勝、奇々妙々たる靈容秘境、清淨無垢なる雄景麗色、湛々たる碧潭、漫々たる瑠璃湖、淙々の聲、滔々の響、峯の嵐、谷のせゝらぎ、梢に遊ぶ鳥の囀り、まことに鬱鬱たる瑞相、莊嚴なる靈氣、山々谷々に漲り、自ら常樂我淨の文を唱へてをるのであります。

自然界のかゝる靈異身に泌み骨に徹してこそ、そこに宿る魂の感激や衝動は、やがて山色に如來身を觀じ、谿聲に妙法音を聽き、天地法界の秘琴に觸るゝ法悅となつて敬虔の念、信仰の心を喚起し、自ら六根淨化のよすがとなるのであつて雄大清美、莊嚴幽雅な景觀を有つ吾妻連峯の誇りは、その山岳美、深林美、溪谷美と共に上求菩提、下化衆生の靈域として登山の開祖役の行者神變大菩薩開踏以來、忍苦精進、抖擻淨心の道場であつた一千三百年の宗教的由緒と歷史を有つてをることにあらうと信ずるのであります。

遠く遡つて日本武尊の神蹤は勿論、八幡太郎東征の遺跡・役の行者、弘法大師の芳躅をそのまゝ昭和の今日、吾等も亦踐むことが出來るのであります。

吾妻連峯が古來より信仰中心の靈山であつたこと、並に參詣修行者が往時隆んであつたことを回想すると共に登山流行の今日、忘れられたる吾妻道場の再興開發は、地元に住む吾々に課せられたる時代相應な義務ではなからうかと思はれることであります。

この講述集は曾て新聞紙上や雜誌々上に發表した舊稿や、他の資料を敎材として吾妻登山團體同行者のために昭和三年以來、山中の溫泉宿で度々講話いたした時分のノートを整理布衍し、外に一二章を增して輯錄したパンフレットであつて、一千數百年の昔より連綿吾國に傳はれる山岳宗敎たる修驗道の敎理信條の一端を講述いたしたものでありまして、要は時代の趨勢と時局の重大なるに鑑み、一般登山者の覺醒を促すと共に聊か國民精神の發揚に資し度く敢て心境を告白すると同時に先德の遺業を讃へ、所信や希望の一端をも併せて披瀝いたした次第でありまして、曾て昭和八年江湖に發表いたしました如く、吾妻連峯の開發と抖擻道場の復興を提唱し來りし所以の趣意も亦實にそこにあるのであります。

吾妻道場の開發施設に關しましては、元より識者の協力に待たねばならんことでありますが、提唱の趣意愚見に對し讀者の同感共鳴を得ましたならば幸慶之に過ぎずと存じますと共に、此の小冊子に盛りたる內容が倖にも聊かなりと社會人心の敎化に裨益するものあらば寔に以て本懷の至りに堪へざる次第と存じます。

昭和十二年　支那事變酣なる秋

小午田山護法窟にて　講述者識

國民精神總動員に鑑み山岳宗敎の普及と吾妻連峯の開發を提唱す

目次

【一】山と修養……一
(一) 山の魅惑と朝日の感激……一
(二) 山と神秘力……二
(三) 山と心身の修錬……四
(四) 山と山岳宗敎修驗道……六
(五) 修驗道の山岳觀……九
(六) 秩父宮殿下の御登山觀を拜す……一四
【二】登山と修驗道の十界修行……一五
(一) 地獄道（忍苦の修行）……二四
(二) 餓鬼道（知足の修行）……二七
(三) 畜生道（勤勞の修行）……二九

(四) 修羅道（精進の修行）……三
(五) 人道（抖擻の修行）……三三
(六) 天道（歡喜の修行）……三四
(七) 聲聞道（聞法の修行）……三六
(八) 緣覺道（瞑思の修行）……三七
(九) 菩薩道（奉仕の修行）……四四
(十) 佛道（報恩の修行）……四七
【三】 山駈けの意義に就て……四八
【四】 登山と菩薩道の實踐……六五
【五】 三道一貫と修驗道……七一
【六】 靈場としての吾妻山とこれが開發に就て……八〇
【七】 支那事變に鑑みて特に不動明王の信仰と山岳抖擻を强調す……九〇
附錄
吾妻山脈中の溫泉……一〇三

國民精神總動員に鑑み
山岳宗教の普及と吾妻連峯の開發を提唱す

三井豐興講述

【一】山と修養

（一）山の魅惑と朝日の感激

はれてよし、曇りてもよし富士の山
もとの姿は、かはらざりけり

巍然として雲表に聳ゆる彼の富士の山を眺めて、莊嚴な此姿こそ我大日本帝國の表徵であると、ヨク人は讃へます。

高くして淨く四隣を壓して、而かも優美なる八面玲朗たる純眞の姿よ！

正義を尊び邪僞を排し、而かも仁慈に勇む――まこと吾等日本人の理想でなければなりません。

朝な夕な仰ぎ見る吾妻の山々、泰然不動、毅然として動かず、從容自若、悠然として逼らず、無言のうちに靈性を發揮して吾人を端倪せしむ、何たる崇高な姿でありませう。

山巔に登つて明け方の東天に雄莊なる朝日の姿を拜した時――太陽によつて象徵されたる日本の

理想を意識し「光は東方より」を標語とする吾人にとつて――日本人といふ自覺が、今更ながら胸に高鳴るを覺ゆると共に、天日と共に際りなき萬世一系の皇統の下に生を受けたることを心より感謝せずにはをられません。

天地の闇を破つて煌々たる日輪を東天に拜した時、吾等は皇統連綿、悠久三千年の光輝ある國史を回顧して、感激と矜持と意氣とを感ぜずにはをられぬのであります。

この感激と矜持と意氣こそは、皇國日本の榮光を四海に布くべき祕められたる使命を自覺する原動力ではないか！

東天に輝く朝日をば山岳宗教修驗道では古來日輪尊と崇め神の姿であると共に、眞なる吾等の心の姿と觀じて禮拜したのであります。日輪の如く公明にして正大なる仁慈の光に照されて、明々朗々たる心に蘇る時、そこに神と吾れとの感應のヒラメキがあるのです。

（二）山と神秘力

科學者にとつて山は地球の皺であり、地上の瘤にすぎぬでありませう。然し吾等は山に崇嚴なる生の神秘力を感じます。そして淨さと美さを認めます。生きんとする力、伸びんとする力、產まんとする力、慈愛に充ちた生々發展の力を感ずると共に、亦一面には侵すべからざる威力を感じます。

「說文」に山は宣なり產なりとありますが、吾等の先人は山の精とも云ふべき此の神秘力の裏に天地法界の威力を認め、これを「山神」として古來崇めたのも所以あることであります。

人間は何時かは死ぬるものだと知らぬものはない。然るに此の「何時か」を遠い遠い未來のことのやうに思ひ込んでをるのです。然しけふ寢て、あす死んでゐないと云ふことを今日誰が保證できませう。況んや自分は明日も生きると云ふ權利はないのだ！

人間は死を神秘的に考へたがる、然し死すべき人間が現に生きてゐるといふことの方が遙に神秘的な事實なのです。而して、この生きてゐるといふことは決して單なる自己一人の力ではないのである。實は生きさせてもらつてゐるのだといふことは事實なのです。自己の生きてゐるためには大なき背景に抱かれてゐることに氣がつかねばならんのです。

生の神秘に觸れたとき、この大きな背景に對して感謝と感激に充ちるのであります。

人生の根本は實に見えざる大きな自然の力であるのです。密教では宇宙の姿そのものゝ總體を胎藏界（物質）の大日如來とし、森羅萬象にみなぎる力の總合を金剛界（精神）の大日如來として崇めるのであります。

たとひ肉體の上に宿つた生に於て短かくとも、眞には不生不滅の久遠の生の一部分なのだ。與へられたる吾等のほんとうの生に目醒め、力强く永久に生きることに努めねばならぬ。そこに生の尊さがあり意義があるのです。吾等は不生不滅の悠久なる人生の神秘力を特に山に於て感ずるのであります。

山は吾等を慈み、吾等を慰め、吾等を勵し、吾等に囁き、吾等に敎へる――慈母であり、慈父であり、友であり、師であり、聖者である。吾等の憧憬の的でなくて何でせう！

峨々たる高山は上求菩提の向上心を示し、深々たる幽谷は下化衆生の愛他心を敎へる。觀じ來れば行雲流水一として吾人の師範たらざるはないのです。

大自然の殿堂は些の差別なく、吾人に對して其寶藏を開いてゐるのです。美術上の傑作も、道德上の敎訓も、宗敎上の妙法も、此の偉大なる寶庫に藏められてゐるのです。妙法は黃卷赤軸の內にのみ存するに非ず、伽藍梵舍にのみ存するに非ず、心眼を開いて見れば白雲の行くところ、流水の響くところ、妙法を轉ぜざるはないのです。歌に

おもしろや、散るもみぢばも、さく花も
　　おのづからなる法のみすがた

と。げに「柳は染む觀音微妙の相、松は吹く說法度生の聲」であるのです。

眞心を以て合掌し、法界の裏に神秘の親を呼び求むるならば、吾等はこの心の內に神佛の聲を聞き得るのであります。

(三) 山と心身の修錬

近來スポーツとしての登山熱を煽り、夏季に入ると靑年子女の登山が流行するやうになつたことは、體育の向上と共に趣味や慰安を健全な方面に求める風尙として、大に喜ぶべき現象であると存じます。たとひスポーツのみの目的で漫然登山しましても、一度山の靈氣に接する時、いふべからざる神秘に觸れ、何等かの衝擊を受けずには居られぬ。山岳スポーツとして、そこに亦自ら掬すべき妙味はありませう。

然し乍ら更に一歩進んで、宗敎的意識を以て高峯靈山に接したならば、そこには奧底の知れぬ崇高なる妙味が橫溢してをるのであります。山の神秘を知るには、どうしても宗敎的觀念を以て接するにあらずんば、當底味ひ知ることが出來ぬのであります。出羽の湯殿山が古來、戀の山と呼ばれたのも蓋し所以あることでありませう。

現代の一般風潮を觀察するに、表面の體裁や糊塗にのみ腐心して、魂の敎養を閑却し、物質や地位をのみねらつてをるのであるが、單に山の表皮にのみ接して山の神秘を味はうとしない現代登山者の態度なり心掛けなりに、その反映と缺陷を見るのであります。第一山を征服するなどといふ西洋カブレの直譯語なり觀念なりが、既に謬つてをるのではないか。富士の靈峯を足下に立ちて、オレは富士山を征服したなどは自然に對する冒瀆ではないか。自然界の大なるに反し、人間の如何に小なるかを思ふとき少くとも、こうした言葉は不謹愼であると思ひます。斯樣な觀念に立脚したスポーツ登山の究極は傲慢、排他、鬪爭、野心、虛榮、射倖等々の悖德心や非人道的意識を釀成する弊風を助長するの結果を招來するの憂がありはせぬかと想はれます。

申すまでもなく技術を要する運動は、惠まれたる一部の人々に限られてをるのであるが、山登りは一般の人々にも雜作なく出來得る運動であり、一面には體育の向上となり、意志の鍛錬となり、更に進んでは宗敎心を涵養して國民精神の昂揚となつて、魂の敎化を得たことならば、國家にとつては、まさに一石二鳥の良策であらうと信じます。

元來東洋人、殊に日本人は自然を敬愛し、その莊嚴性、優美性に感激し、その內に宗教藝術を求めて精神生活を豊かにしたのであります。然るに西洋人は主として肉體美、人工美を求める傾向が強いのであります。自然に對しては謙虛、從順の美德に缺き、飽までも暴慢であり傲岸であつて、而かも自然界と人間とを別なものとして離して見る結果、人間の力を過信し、自然の征服などと稱してをる點から見ましても、幽寂高雅な性格は有ち合はせてをらぬかの疑問さへもあるのです。彼等は本來、愛本主義を奉する結果、肉的本能慾に墮する傾向強く、吾等日本人の奉する報恩主義とは、その結果に於て雲泥の差が生ずるのではないか。これ要するに物質萬能の科學偏重の缺陷より生じたる差異であつて排他、利己、對立、抗爭等の社會意識を釀成し、敬虔、仁慈、和順、感恩、忍從、犧牲、奉仕等の美德は無視せられ勝ちであつて、權利義務の理智的一方に偏するか、妥協苟合の情實的一方に墮する結果となるのであります。

近時吾國にも、かゝる風潮が痛く蔓延し、唯物的、利己的、功利的、享樂的、官能的生活を逐はんとする傾向のいちゞるしく濃度を加へて來たといふことは、見逃す能はざる事實であつて、この弊風を矯め、この缺陷を補ひ、この害毒を除き、以て人心惡化、人情愚劣の根源を淸め、その謬を匡さんとするには、これが敎化指導宜しきを得なければならぬことは、敢て贅言を要しませんことであります。

（四）山と山岳宗敎修驗道

蒼穹の下に繰り擴げられた山稜は强き魅惑を以て近代の若人達を力强く招いて止まんのであります。殊に盛夏の候、炎熱の都塵に疲れたる人々にとつて、特に憧れの對照である綠滴る潑溂たる夏の山は、こよなき安息所であります。この慰安所に於てこそは自然の靈氣に浸りつゝ荊棘を踐み、嶮岨を攀ぢることによつて、知らず識らず强固なる意志を養ひ、高雅なる思想がはぐくまれ行くのであつて、人心の頽廢を救ひ、質實剛健の氣風を養ふ上に於て、如何に效果あるかは疑ふ餘地がありません。況んや敬神崇祖の情操を培ひ、報本反始の觀念を啓發して國民精神を昂揚し、思想を善導して以て覺醒の機會を與へ、日本國民として同時に亦人間としての修養に資するところ尠なからざる點より考察すれば、山岳道場に於ける入峯抖擻の修行は最も效果的であらうと信じます。

元來、山と宗敎とは東西その軌を一にして、深い因緣關係をもつてをるやうであつて、オリンポス山はギリシヤの神々の聖地であり、エホバの神はシナイ山上に現はれ、又キリストの說敎の內でも、山上の垂訓はその最も中心的なものとなつてをるのであります。

殊に佛敎にあつては、敎祖釋迦如來は檀特山に入つて修行せられ、一代肝心の法華經を始め、多くの經典は靈鷲山に於て說かれてをり「深山に入りて佛道を思惟す」とか「山林寂靜の所に入り淸淨の地を求め」とか、山林修行のことが、しば〳〵經文に說かれてある位で、古來吾國に於ける高僧大德も殆んど皆山に入つて修道せられてをるのであります。

而るに、この山岳と宗敎とを最も密接に結びつけ、山岳を以て國民精神修養の道場となし、神佛の淨土と觀じて吾國獨特の山岳宗敎を打立て、大衆に登山の醍醐味を啓示してくれた偉人は誰あら

る役公小角その人であります。

登山とかハイキングとか云ふと、すぐに外國からでも仕入れて來た最近の趣味や流行のやうに考へる人が存外多いであらうが、日本の歴史を新しい眼で見直した時に、全く驚異に近い文化を有つてゐることに氣付くのであります。

登山家を以て任ずる人々の内で、役小角と云へば日本に於ける山登りの開山であることを知らぬばかりか、その名さへも知る人が幾人あらうか。七十年の生涯中、國内三十六ヶ國に亙り八十餘の前人未到の高山を踏破し、數多の神佛を勸請しては聖壇を築きて行場を定め、順逆を指定して因果修行の法則や行事を設くる等、空前の偉業を完ふし、鬼人を度し、道路を拓き、橋を架け、溫泉を發見し、植林をなすなど衆人の啓蒙教化に盡したことは今日に至るも不滅の光輝を放つてをるのであります。

さればこそ、光格天皇が神變大菩薩なる御徽號を賜ふた御勅書の首めに「勅す、役公優婆塞は、海嶽抖擻の巧、古今辛苦の行、前は古人に超え、後は來者を絶す、若しそれ妙法明教の四海に施くや、神足僊脚の五方に遍きを以てするにあらずや……」と御宸筆を以て御讃嘆あらせられてをるのであります。

役行者にとつては、山も谷も海も川も、ツマリ日本全體が修練の大道場であつたのであります。そして一期七十年、海嶽抖擻の行者を以て任じ、大自然の琴線を叩いて解脱の三昧境に入られた吾國に於ける登山修行の先驅者であり、神道と儒道と佛道の三道を一貫する修驗道山伏の開祖であります。この流れが一千三百の長年月に渉つて敬神崇佛並に人倫五常の道德を打つて一丸（二宮尊德翁の所謂神儒佛一粒丸）とする道風を全國に普及し、皇室中心主義を標榜して皇化の扶翼に盡した

る功績は蓋し大なるものがあるのです。

（五）修驗道の山岳觀

山岳宗教たる修驗道は大自然の莊嚴を讃美し、その神秘を禮讃する法門ではあるが、單なる自然崇拜教ではないのです。無意識、無軌道の信仰を山に捧げるのではないのであります。

修驗の山岳觀は体系を整へた宗教であり、哲學であり、その登山の様式は一定の規矩に遵ふ信仰であるのです。

登山などゝ云ふと、何か單なる遊びごとのやうに考へる人もあり、輕はづみな氣持で山登りをしたがために遭難したといふ事實が多いのであるが、昔の登山者は全く眞面目な心構へであつて、深山幽谷に分け入り神秘な山川の靈異に感孚し、同化して即身即佛の本覺位に達せんとするための聖壇として山を觀てゐたのでありますから、信仰なり敬虔なり、その信念の熾なることは非常なもので、遊びごとなどゝいふ氣持はミヂンも見られず、全く命を打ちこんでの登山であつたのであります。

然らば何故に山そのものに對し、そんなに信仰を捧げるのかと云ふに、宇宙それ自体は眞理そのものゝ顯現であり、天地山川の姿そのものが常住不滅の宇宙の本体から現はれた現相であり、花咲き

鳥囀り人働くはその活用であつて、本体と果報と應用の三ツが宇宙實際の姿であり、而かもこの姿は異つた個々別々な姿ではなくて、本体そのものゝ應化活現の姿に外ならず、この三ツの妙々たる宇宙の姿の妙体を法身佛と稱し、この妙相を報身佛、この妙用を應身佛と稱して、これを佛の三身と唱ひ、この三身佛は畢竟一身佛に歸一するのだと說くのが佛敎の宇宙觀でありますから、天地法界の姿そのものを三身佛と仰ぎ、森々たる嶺岳も、鬱々たる岩洞も、乃至山河草木も神佛の直体と觀じて合掌するのであります。天眞そのまゝの山の姿を法身の淨土と觀じ、妙法蓮華の淨土と觀じ眞如法性の誠の姿と觀じ、泰然不動の眞体と觀し、三身佛の總体と觀じ、總じて一乘菩提の道場として崇めるのであります。そして山そのものが因果の道理を如實に顯現した金胎兩部の一切諸佛諸尊の本誓、相好、功德を展開したる曼荼羅、卽ち聖壇と觀るのであります。

かやうな觀察は、單なる方便から出たコヂツケな觀かたではなく「草木國土悉皆成佛」といふこと、卽ち森羅萬象は因果一體の妙理を具足圓滿したる法體蓮華であるといふ觀方は、佛敎の徹底したる世界觀であつて、富士山を芙蓉峯、卽ち蓮華の峯と觀たのも、熊野三山、出羽の三山、吾妻三山といふ風に三身佛の浮土と見、三諦一念、一体三寶の表示と見たのも亦自分自身を天眞佛と稱し大覺位と稱し本不生位と稱し、卽身卽佛と稱したのも皆佛敎の世界觀人生觀に基くのであります。

山と云ふ字は縱三本に横一本で出來てをる山の姿を象つた形象文字であるが、寺院には必ず山號と云ふものがあつて、何々山、何々寺院となつてをり、山と佛敎とは切つても切れぬ因緣があるのであります。卽ち法身、報身、應身の三身は一身に歸するといふ佛敎の敎理を宣布する道場が寺院であり、佛法僧の一体三寶を護持する法城が寺院であつて、山といふ字は恰かも三身卽一、一体三寶の妙理を表示した字であり、モト〳〵佛敎は山から出て來たから寺院に山號はつきものとなつたやうな次第であります。

法報應の三身と分けては見るものゝ、要するに本体多彩の顯現に外ならず、歸するところその根幹は一つであつて、この道理を本体と現象、平等と差別と解しても宜しいのであつて、地上の突起である現實の山そのものが、恰かも佛敎の原理を如實に示してをるのであります。

聖德太子は「常住の法身を佛寶となす、この法身能く物の軌則となれば自ら法寶たり、又この法身則ち能く理と和合するを亦僧寶となす」と勝曼義疏に述べられて佛法僧の一体三寶の深意を說明せられ、十七憲法の第二に「篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり、則ち四生の終歸萬國の極宗なり、何れの世、何れの人か此法を貴まざらん、人尤も惡なるは鮮し、能く敎ゆれば之に從ふ、それ三寶に歸せずんば何を以てか枉れるを直さん」と宣示され、又第一には「和を以て貴しとなす、忤ふなきを宗となす、人皆黨あり亦達するもの少れなり……」と仰せられて和の大本をお示しになつてをります。

不變不動の眞理の實体、常住不滅の大道の生命が所謂法身であつて、太子はこれを「萬德の正体」と仰せられたのであるが、この正体が卽ち佛寶であります。この佛寶が萬事萬物の軌則となつて國の生命理想を活動運用せしめる國憲國法となればそれが法寶であり、國の生命理想を國民が單獨にも又團体的にも体得し、實行するその顯れが國民の和合團結の生活であつて、それが僧寶であります

す。この佛法僧の三寶は一体不離であつて、萬德の正体たる宇宙の本体、則ち法身を離れては無意義となるのであります。

僧とは和合衆と云ふことであつて、團結團体といふ意味であります。天地の本体たる大道に和合する國なるが故に、日本は大和の國であり、それだからこそ眞の平和を國是とする國であり、隨て天地の大道を魂とするが故に日本人は大和魂を有つのであります。

坊主を僧侶といふのは大道に和合する仲間、則ち和合團体の團員といふ意味であつて單に袈裟や法衣を着てお經を讀むから僧侶と名付けたのではないのであります。僧侶と云ふ言葉を坊主の代名詞とのみ消極的に解することには誤解が生ずるのであります。

この大和の精神こそは所謂日本精神であつて、天地神明に耻づるなき正義を根本とする大精神であるのであります。天地の大道を離れて日本精神なるものはあり得ないのであり、日本國家もあり得ないのであります。人生の意義に徹せず、天地の道理も辨へずして國體の本義を闡明することは不可能であり、隨て日本精神の昂揚は無意味であります。非常重大な今日尙更此の感を深うするのであります。

一千三百年の昔に於て聖德太子は深遠にして、濶大なる世界觀の上に我國體を宣明せられ、千古を貫く國の大道、國民の本義を顯揚せられたといふことは有り難い極みと存じます。

三身卽一、一体三寶の玄理は、天地の大道であり、人道の本義でありまして、山伏とはこの眞理の中に伏すこと、云ひ換へれば眞理の顯現たる天地法界に抱かれて、自ら眞理と融合同化して和合

する修行者たることを意味するのであります。

天地の大道を把握し、和合の道理を体得すれば吾國体の大本にも徹し、人生の意義も解け、和衷協同の人道の本義も明かとなり、正邪善惡も判定出來るのであつて、眞理の中樞をツカミ得てこそ自性明瞭なると共に吾國体に對する觀念も自ら明徵たり得るのであります。

修驗道の山登りは、開祖役行者の流風を汲んで、轉迷開悟人格完成を目當てとする事上錬磨の道であり、その敎義の內容は全佛敎を抱擁し盡す程の廣さと、日本的なものを有つてをり、敬神を旨として舊義を忘ぜず、超宗派的法門として根本道場を大和の大峯山（吉野山より熊野山に至る七十里の山脈）とし、明治初年までは毎年　天皇陛下の御撫物（御肌に召す御衣）を奉持して、寶祚無窮の御祈禱を奉修しつゝ修行したのでありますから、當時全國に散在した末徒は、一生に一度は田地を質入しても必ずこの山脈に修行せねばならぬ鐵則であつたので、それは全く眞劍そのものであつたのであります。

修驗道の勢力を恐れた德川氏は牽制策を講じ二三に分割し、佛敎の一派としての扱ひを受けて明治維新に至つたのであるが、法頭たる宮樣は僧籍を離脫せられ、聖護院宮の如きは海軍提督になられる等一大動搖の結果、現在は法門そのものが天台眞言の一派に合流合体して兼行となつて獨立してはをりません。現今に於ても天台寺門の大本山、京都聖護院門跡に於ては毎年　賀陽宮殿下の御撫物を拜受して大峯山に入り、寶祚無窮、鎭護國家の傳統的祈禱を奉修し、殊に近來盛大に入峯修行を持續してをるのであります。

全國に聳ゆる著名な山々は、北海道を除いては殆んど皆役行者の開蹠地であり、その末流によつて開拓された修行の道場たらざるはないのであるが、今日は何處の山々も道場たるの意義を沒却湮滅し、無軌道の山登りとなり、單なる參詣の名に於て將た又スポーツの名に於て無自覺なる登山者を以て埋めてをるやうであります。

（六）秩父宮殿下の御登山觀を拜す

かゝる秋に當り登山に御趣味を有せらるゝ秩父宮殿下には先年「山の旅」と題する御文章を御執筆、大阪朝日紙上に御發表になられたのであります。この御文章を拜讀いたしまして、いひ知れぬ感激と禪悅を禁じ得ないのであります。そのお言葉は今日の登山者に對する聖語として味ふべきものでありませう。その御一節に

山そのものは久遠の生命であり大聖哲である。

登山は虛榮の表徵である下界の流行と違ふ。登山は吾々が赤裸々になつて、大自然の前に幽遠なる理想を辿る奮鬪であり修養であり喜悅である……

我々の短かい現世の生命、永遠の死後の生命も皆宇宙の外には出でないのだ。さうして見ると時にはこの宏大無邊の大自然に抱かれてこれを靜思し、理想そのものである宇宙の神に歸一するの餘裕はほしいものである……

山登りはトリックでは出來ない。一步々々確實な步みを運んで初めて目的が達せられる。自分

も、今後はこの心持ちで世の中を渡りたい――山を知らない人に山が敎へたものはこのことだつた……

殿下の山岳觀登山觀は、畏くも寔によく山岳宗敎修驗道の敎理信條に契合するのであつて、何人も玩味休得すべき一大聖訓であると感激に堪へざる次第であります。

【二】登山と修驗道の十界修行

古來修驗道の根本道場となつてをります大和、伊勢、紀伊の三國に跨がる吉野群山より熊野に至る五千六百尺を首峯とする台高山脈、六千四百尺を首峯とする大峯山脈、四千六百尺を首峯とする西部紀和國境山脈等、約七十里に涉る所謂總稱大峯山、この山脈が役の行者の餐霞臥雲の苦修にかゝる開創の道場でありまして、この山に修行することを入峯修行又は兩峯修行と申すのでありますが、一千三百年前役の行者がこの山脈中の金峰山（山上ヶ嶽）の頂上に於て末世衆生のために相應はしい信仰の本尊現はせ玉へとお祈りになつた時に、天地震撼して藏王權現のお姿が現はれ、自らこのお姿を刻んで同所に祀られたといふことは有名な話になつてをりますが、先年故人となられた博士坪內逍遙先生が「役の行者」といふ劇本を書かれてをりますから、それを觀たり讀んだりした方は藏王出現の謂れに就てほゞ御想像のことでありませうが、役の行者の靈驗談は澤山あるのであります。この藏王權現が此の山の本尊となつてをるのでありまして、吉野山には大きな藏王堂が出來てをつて、四時參詣者が雲集してをるのであります。藏王權現とは如何なる精神內容を有つた本

尊かと申しますと堅忍不拔、應化自在、大慈大悲の哀愍攝取、至誠憂憤誠に熱烈な衆生救濟に總身燃えたつ三面六臂の活動力に充ちた本誓功德を表はした忿怒尊で、地上の惡魔を降伏して國土を鎭護し、天魔外道を摧伏して正法を守護し、盤石の如き不動の精神を發揮して四海の重障を鎭め、空中の曜宿作障を攘ふ等、拆伏を第一義とする勇猛果敢な精神的內容をもつた本尊でありますので、國家鎭護の對照として古來鑽仰されてをるのであります。吉野山は櫻の名所であるが、この櫻は役行者が一千三百年の昔、藏王權現に手向けんとて供養のために植えたものであります。

この大峯山と熊野に對する信仰は、平安朝時代が最も盛んで、登山參詣修行者も上下を擧げて實に夥しい數に上つたのであります。

畏くも天智天皇、天武天皇、嵯峨天皇、仁明天皇、文德天皇、淸和天皇、醍醐天皇、村上天皇等の天子樣が特に御信仰あらせられ、御自筆の御經とか御護りとか、或は御劒等を大峯山中に埋納せられ、殊に寬治六年（今より八百五十年前）白河法皇が京都を發して山上ヶ嶽に御幸あらせられました時には、時の天子樣が三日間御精進遊ばされた程で、これらのことは皆な記錄に殘つてをるのであります。その外、お幾人もの親王樣方が困苦を御厭ひなく御修行のために御峰入りあらせられたことは「峰入りや宮も草鞋の旅路かな」といふ句によつても想像されるのであります。

中にも史上最も有名なのは御堂關白藤原道長の金峰山參詣であります。飛ぶ鳥も落す程の勢のあつた道長さへ更に幸運を祈るために寬弘四年（今より九百三十年前）登山して經卷を埋め願文を奉つて祈念したことは有名な話となつて傳はつてをるのであります。

其他名僧知識として有名な僧侶で、此の山脈に入つて修行された方の內、行基菩薩、弘法大師、良辨僧正、智證大師（三井寺の開祖）、理源大師（醍醐寺の開祖）、增譽大僧正、行尊大僧正、西行法師等は最も有名であります。

此山脈が近年國立公園に指定され、將に開發されんとして居るのでありますが、修驗道の古來の傳統を重んじ、關係者一致、女人登山禁制を主張した結果、吉野山より奧の行場へは多分女人の登山はこれまで通り禁制が實施されることだらうと思ひますが、公然と女人禁制を實施されるのは日本では、此の山脈唯一ヶ所丈けであります。女人禁制といふことに就ては、その可否に就いていろ〳〵說もありますが、か弱い女人が好んで危險を冒してまで嶮難を跋涉せずとも、信仰や修養、慰安に適した山々は澤山あることであり、殊に男女混合となると、自然修行に惡影響を及ぼし、風義亂れ勝ちとなるおそれもあり、神聖なる道場を冒瀆する憂ひがあるといふのが第一理由となつてをるのであります。殊にだらけたが最後緊張を失ひ到底山修行は不可能だからであります。

この根本道場たる大峰山以外役の行者の開踏された諸國の山々の內、國峰（くにぶ）と稱してその國々に於ける天下泰平、國家安全の祈願道場と定められた山々へ登ることを國峰（くにぶ）修行と申すのでありますが總じて參詣や修行のために靈山高岳に登ることを一般にお山駈けと申してをるのであります。

これらに就て斯かる小冊子で詳說することは到底不可能でありますので、事相方面のことに就ては全然拔きにして、登山修行の指導原理、卽ち十界修行の概念に就てその概要丈けを講述いたします。

富士山や月山を一合から九合に分けて十合目を頂上としてありますが、如何なる理由で一合二合と名付けて頂上までを十合と區分したのであるか、これに就て有名な登山家の著書に噴飯に價するコヂツケな解釋のしてあるのを曾て私は讀んだのでありますが、恐らく日本國中に於て此の意味や由來を知つてをる人は幾人もなからうと思ふ。

元來修驗道の密敎は特に日本獨特なもので、天台や眞言の密敎たる台密や東密と頗る趣も異なり口傳口訣や隱語も多く、甚だ難解であると共に、明治維新當時に於ける佛敎排斥の大動亂を境として廢滅の姿となり、この法を傳燈相續して護持せんとする篤志の士が殆んど皆無となつた。それは廢佛棄釋のドサクサ紛れに無分別なる役人の手落ちから修驗道が法令を以て一時廢されたので、當時權現の別當をして居つた法印山伏の大部分は改稱神社の神主となつた、檀家寺の和尙となるもの還俗して官吏や敎員となるもの、町人、百姓となるもの等、生活上死活の分岐點に立つたので、支離分散して人數に於て日本第一を誇つた敎團が一時に分裂解團作用を起して終つた。當時本縣下には約一千人の法印と、約六百の寺籍があつたもの現在に於て傳統を保持して轉派もせず、正統修驗の命脈を保つて遺鉢を繼ぐもの敎師級約五十名と、寺籍僅に二十ヶ寺院となつて終つた轉倒ぶりによつても想像せらるゝ如く、時勢に抗し難く祖法に忠實なるものや、護法の念篤きものが全國にも殆んど見られなくなつて終つた。殊に肝心な修驗の道場たる全國のお山の大部分が、神社の境內や官地に繰り込まれて宗敎のお山ではなくなつて終つた。佛敎排斥の風潮や時の政策が反映して一千三百年來のお山の傳統を一朝にしてブチ壞して終つたのでありました。一千三百年來、國家皇室の

保護を受けて居つた佛敎が一時に國家からツツパナサレテ終つたのであります。自づとお山からは山伏の姿が消えて、こんどは何々敎とか、何々敎會といつたやうな鴻的なものが現はれて、取つてかはるやうな奇現象を呈し、修驗道は廢滅同樣に歸したのであります。

斯樣な具合で場所によつては佛像經卷は泥土に埋沒せられ、伽藍梵舍は燒却されると云つた有樣で、秦の始皇帝式の二の舞が演ぜられたから、坊主山伏どもは戰々兢々たること爾後二十年に及んだのであります。修驗の行法が廢れ隨て山の先規に通達する先達も皆無となり、自づと斯道の奧儀が晦蒙とならざるを得なかつたことでありませう。登山の指導原理を失つた今日百歲の老翁や五歲の兒童が、富士山上に登つて雀躍するも、富士登山に鎧兜を着て意氣を示すも、山上高く日章旗を揭ぐるも、時節柄結構であるが、その旺盛なる元氣を指導誘掖して十二分に意義あらしめたいものと思ふことであります。

さて登山道路を一合から十合に區分したのは天臺敎義で、重要部分をなす「十界一如」の道理を山の麓から頂上までの間に十に區劃して表示したものであることは密敎に造詣ある人なら、ほゞ想像もつきませうが、何故に合と名付けたかに就て合點する人は案外少なからうと思ふのであります。

十界と十に分けては見るものゝ本來は一であつて、十そのものは孤立した存在には非ず渾然一體であつて、バラ〳〵に獨立して分れて居るのではない。一から分れた十であつて、當然一に歸すべきもの合すべきものであつて、恰かも一升は十合であり、十合は一升であつて、一合は單位一升の一部分である如く、十界は十離に非ずして十界一如であるぞと云ふ、十界互具和合一如の敎理、卽

ち法華經第二の卷にある方便品の「十如是」の道理を修道者に納得せしめ、味識せしめんために一面に於ては方便上、他面に於ては便宜上、そこには祠を祀り或は小屋を設け室をつくり、登る者も下る者も共に會合し、共に宿り共に休み共に語り――袖振り合ふも多少の縁とやら――同じ氣待同じ希望、同じ信仰で上求菩提、下化衆生の向上愛他、融合一致、自他平等、本末一體、因縁相續、四海同胞の天地の道理を覺らしめんための善巧方便上合と名付けて合目の區分を樹てたのであります。天地の道理に和合せざる者を和合せしめんため、孤立獨歩してまつろはざる者をまつろはし、離反する者を結合せしめんため、而かも共存共榮、渾和融合の一大生命體の一分子としての存在たる自己を認識し、覺醒せしめんための觀念と實踐を兼ぬたる行場として合目の宿場は定められたのであります。ですから昔は合目の宿場は勿論、途中で同行者、即ち登山者に遭遇すれば必ず共に挨拶を交すのが山の禮儀、道德となつてをつたのみならず、お互に勵げまし合ひ、注意し合つて人情を發露し合つたのは斯樣な趣意によるからであります。

日本人の内には大臣もあり、大將もあり、商人もあり、百姓もある、學者もあり、無學者もあり金持もあれば貧乏人もある。性格を見ても體質を見ても千差萬別皆違ふのである。同じく人間であり日本人であり、兄弟であり乍ら自ら差異はあるのであります。この差異は何に因り何に縁て生ずるのであるか、それは前世からの銘々の思慮行爲の業因による習性が是の如き結果に因縁づけて終ふのであります。是の如くして次郎、太郎、五郎と差別相が生じたのであります。是の如くすれば是の如くなるのであり、亦是の如くすれば是の如くもなるのでありますから、吾等は是の如くなるには是の如くせねばならぬ道理を辨へることが肝心となるのであります。「十界一如」の教理はこの道理を教へたのであります。

吾等お互は因果應報の理によつて上下甲乙の差別相を有つことになるのであるから、ツマリ勉強すれば學者ともなり、儉約すれば金持ともなれるのである。即ち無學者必ずしも永久無學者としての存在には非ず、貧乏人必ずしも永久に貧乏人としての存在ではないのであります。無學者あればこそ學者生じ、貧乏人あればこそ金持が出來るのであつて、前者も後者も別々な異つた存在ではなくて大本を調べて見ると一體不二の同一人なのであります。

又官吏、軍人、百姓、商人と職業が異ひ、大將、中將、將校、兵卒と階級が別れて差別はあるが決して個々の對立せる獨立存在ではなく、職掌こそ異なれ、國家大和合體の一員であり　陛下の赤子たるに於て何の差異も輕重もない如く、大臣、大將も匹夫野人も、小にしては家庭の一員であり、大にしては國家の一臣民であり、更に大所に立つて觀れば紛ふべくもなく宇宙の一分子としての責任存在たることは事實であり實相なのであります。吾國が君臣一體、忠孝一本、擧國一致を國是とするは「十界一如」の教理に示す如く天地の道理を指針とするが故であつて朝野和協、文武一致、上下一心の聖旨に基き「汎く一視同仁の化を宣べ、永く四海同胞の誼を敦くせんことを」奉體して經綸を行はんとするのも平等一如の國體に因由するからであるのであります。

富士山と一口に云つたところが、麓もあり、中腹もあり、頂上もある。ツマリ一合目もあれば二合目もあり、三合目もあるのであつて、麓丈け、中腹丈け、頂上丈けでは一部分に過ぎずして富士

そのものゝ全體の姿ではない。麓もあり中腹もあり、頂上もあつてこそ始めて富士山としての全相をなすのであります。

又一合目をヌキにして二合目から登山することの不可能なる如く、十合目の頂上に達せんとするものは先づ一合目から發足して順を逐はねばならぬは勿論のことであり、その一合目も二合目も富士山を離れての存在にも非ず、富士の一部分たると共に亦この一部分あつての富士山であり、同時に亦富士山あつての一部分であつて、一にして十、十にして一、即ち「十即一」であつて、取りも直さず渾然一體、不二の富士山であるのであります。ですから昔は富士山を不二山と書いたのであります。

然らば十界とは一體何であるかと申しますに、佛教に於ては心靈の世界を十に分けて説明するのであつて、心靈上の價値の差別を説いたものであります。

劣等なるもの、優れたるもの、價値なきもの、價値あるものゝ差別を十に分けるのであります。

これを一番劣等なものから申すと地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界となるのであります。

全體、この宇宙の森羅萬象がすべて十界から出來てをるのであつて、隨つて宇宙の一分子たる人間の何人にも、この十界の各相が備つてをるのであつて、平等のうちに差別が生じ、差別のうちに平等があるのはこれがためであります。平等對差別は浪の起伏に外ならず、本體は無差別なのであります。

この十界の各相に促はるゝことなく、十界の全相を見透し、理解し、覺悟し得れば所謂觀察自在の菩薩、即ち觀自在菩薩の大人格者、大君子となるのであります。傳教大師の所謂國寶級の人物となるのであります。

覺りを得てこそ、始めて迷ひなりと知るのであつて、迷ひの内に迷ひなりと知らずしてこれに促はれてゐるのが所謂凡夫であり、衆生であるのであります。修驗道の山修行では迷ひのドン底たる地獄道から覺りの頂上たる佛の位まで順を逐ふて修行するのを上求菩提順修行と云ひ、頂上の佛の位から最下等の地獄道まで逆を逐ふて修行するのを下化衆生の逆修行と申し、山を登り下りする間にこの十界の行を修めるのであります。

九界の何物なるかを知つたものこそ、佛界を顯現することが出來るのでありまして、佛こそ眞に自らの内に衆生を見るものなのであります。

起信論の中に「眞如あるを以ての故に無明あり」とあります如く、無明の迷ひを認むることは眞如の覺りを得たる覺者にあらねばならぬのであります。無明の迷ひとて眞如の覺り以外にその體あるに非ずと知つたことが、眞に無明の迷ひを知つたものであるのです。「無明即法性」「煩惱即菩提」「十界一如」「平等無差別」など佛教で申しますのは、こうゆう道理を指すのでありまして、修驗の山登りでは「因果不二行」「順逆不二行」「十界修行」などゝ稱し、又春峯、秋峯、花峯などの秘稱もあつてこの道理を山の上下に於て實修して躰驗するのであります。單純な神詣りをするためや、伊達に高山靈岳に登るのではないのであり、又今日はやるやうな土地の繁昌策や人氣取りに神佛を

祀るやうな卑しい動機や策略から、先德行者が奇を好んで山上や谷間の險岨に神や佛を祀つたのでもないのでありまして、偏へに解脫の勝緣を結ばせんとの本誓悲願に基かれた獻身的な聖業であつたのであります。

一に口經を讀み、二に身經を讀み、三に心經を讀むといはれますが、修驗の山登り十界行は險難を冒して山水に親しみつゝ體驗に訴へる佛敎身讀の修行であり、心讀の修行であつて、一方では精神の涵養をなしつゝ、亦一方では肉體の鍛錬も出來る所謂靈肉双濟の修行なのであります。殊に千尋の斷崖を攀づる時など雜念の起るべきスキもなく、唯吾身と絕對、唱名も念佛も題目も座禪も、その瞬間に生きてゐるのであります。又千金の名畫に優る大自然の繪畫に接することも出來、白雲の徂徠(そらい)はそのまゝ諸佛歡喜の舞踊であり、谿聲即ち妙法音といつた具合で大自然の審美を味ひ、密嚴(みつどん)淨土に入つた法悅を體驗することが出來るのであります。

(一) 地獄道 (忍苦の修行)

地獄(じごく)とは八寒八熱の苦しみの世界であると云はれてをります。惱み、苦しみ、悲しみの闇黑世界であります。

修驗道の山登り修行は確かに難行道であります。命懸けの信仰であると云つてもいゝので、居眠り半分や退屈まぎれ、遊山氣分では元より嶮難を跋涉することは出來ません。文字通り難行苦行に屬します。けれども無意義に難行苦修を敢てするものではない。行者本記に「此峯に登らんと欲せば眞淨菩提心(しんじやうぼだいしん)を持せよ、菩提心なくして峰に入るは、手を空ふして庫倉に入るが如し、何の得るところあらんや」とあります如く、菩提心を得んため、卽ち覺りを得んための難行苦行であることは申すまでもないのであります。

炎暑を凌ぎ疲勞に耐え、風雨を侵し苦痛に堪へ忍びつゝ山を登り行く——高きに到らんとする者は苦痛を忍ばねばならん——迷苦を脫してこそ法悅が得られるのである。古歌に

行く末は、ちひろの海となる水も
しばし、木の葉の下くゞるなり

で、行路難の人生に於ては何よりも艱難に打ち克つて汝を玉にせねばならぬ。苦中にあつてよくこれを忍び、目的を挫折せずして向上の一路を辿る——辛い苦しみの體驗を嘗め、これを克服してこそ始めて目的は達せられるのです。一歩々々大地に足を踏みしめ、地獄の苦痛を耐え忍んで頂上にたどりつき、やがて四邊展望の悅びを味ひ得るのであります。覺位に登らんもの、その第一歩は忍苦行から始まるのです。

この世を、佛敎では娑婆(しやば)と申します。忍土といふ意味で苦しみを忍ぶ世界、卽ち忍苦の世界なりとの意味なのです。

「三界は火宅なり」で、現世の姿をごらんなさい。國の文明たると野蠻たるとを問はず、昔も今も同じこと、齊しく四苦八苦の束縛を脫することは出來ません。如何に老を厭ふて不老不死の藥を飲んだところが、時機到れば頭に霜を戴き病に襲はれるは必定、「誰が死んだ彼が死んだといふ中に、

我が死んだと人に云はれる」ことになるのです。

生老病死の四苦と、愛別離苦、怨憎會苦、所求不得苦、五蘊盛苦の八苦のために、四方八方から苦しめられるのが、この世の實況でありますから、否でも應でも忍耐して一生を過ごさねばならぬ娑婆世界であるのです。

登山は謂はゞ人生の縮圖であります。人生四苦八苦、五十年の娑婆生活の縮圖を山登りに於て味ふのであります。そして、そこに人生の意義をツカまんとするのです。

修驗道の山登りでは登山口を發心門としてをり、こゝで菩提心を發起し水垢離をとつて心身の罪垢を洗滌し、スガ〳〵しい氣分となり、赤裸々な心となつて、身、語、意の三密實踐行のために發足するのであります。

ツマリ出發の第一歩に於て立志をするのです。誓願を發すのであります。何事によらず出發點が大切である。「精神一到何事か成らざらんや」と朱子は申されましたが、志ほど貴いものはないのです。軍隊教練を見てもわかりませう。發進の第一號令は「氣を付け！」であります。不動の姿勢は準備の姿勢であると軍事學にあります。不動の精神あつてこそ水火猶辭せざる軍人精神が發揮せらるゝのであります。修驗の密教は勿論、天臺の密教でもその行法は不動法から始まるのです。十三佛の始めは不動尊であり最後は虚空藏菩薩であります。虚空藏菩薩の本誓たる大空三昧の悟りを得んには、不動の誓願から入るのであります。不動尊のお姿をヨクご覽になればわかります如く、決然盤石に座して滿身これ不動の精神でアフレてゐます。繩を持ち劍を提げ、跣足のまゝで難行苦行

煩惱惡魔の降伏に專心苦闘してをる姿なのです。然し目的とするところは頂上に戴くところの蓮華臺、即ち悟りにあるのです。心の平和——人類のほんとうの平和にあるのです。

不動の誓願なければ地獄ま餓鬼も克服することは出來ません。古來山登り修行に種々なる戒法や前行のあるのも亦これがためなのであります。

（二）餓鬼道（知足の修行）

餓鬼とは飢渴の苦しみを云ふのであります。物欲の苦しみを云ふのです。いくら食つても食ひ足りない。いくら飲んでも飲み足りないといふ、むさぼりの心、それが充たされたと思ふと、こんどはそれを放すまいとする惜しみの心、これで我等凡夫は苦しみ通すのであります。斯樣な心は餓鬼道に向ふもので、この餓鬼の苦しみを克服する精神の鍛錬は、結局「足ることを知る」——知足の修養より外にないのです。

「水を飲んで樂しむものあり、錦を着て憂ふるものあり」で貪欲飽くことなきものは、一生涯三毒煩惱の惡魔にトリツカれて心安らかならず、亦慈悲の心起らず、我利々々妄者となつて自分を苦しめ人を苦しめ、死しては目蓮尊者の母の如く飢渴の苦しみに亦泣かねばならぬ。

遺教經の中に「足ることを知らざれば富めりと雖も貧しく足ることを知れば貧しと雖も富めり」とありますが、山に登つては贅澤は語つてをられぬ。握り飯に梅干の日の丸辨當、以て足ることを知る修行を味ふのであります。況んや、場合によつては飲むに水なく、減食斷食の苦しみも味はね

ばなりません。入峰入壇修行中に水斷、穀斷の修行あるのはこの餓鬼道克服の行法なのであります。世間にも酒を斷つたり、煙草を斷つたり、塩を斷つたり、穀を斷つたり何か自分の日頃好きな嗜好物や食料などを斷つて、目的貫徹を祈る風習のあるのは皆この餓鬼道修行に當るのであります。

一茶の句に「何不足、人は、はだかで生れたに」といふのがありますが、多欲は結局、不平不滿がケリであります。そこで佛教では小欲知足と云ふことを敎へるのです。人間にせよ、動物にせよ欲望のないものはない。それを全部斷てとは無理である。けれども慾望には限りないのであるからこれを制御し統一せよと敎へるのであります。慾望の性質と價値とに就て、よく內省し立派な慾望なりと信ずるところに精神を集注せよと敎へるのです。

不足不滿を耐え忍ぶ習慣を養成することは、人生の途上に於て最も必要なことであります。近代の科學文明は益々人間の物質慾を增長せしむる一方であつて、物的には華麗であり、便利であり、愉快ではあるが、濁富や我儘を得んとするので自然に他を害するやうになり、世は益々修羅の巷となり、活地獄を現出することになるのです。二千五百年來佛敎は「寡欲なれ」と敎へてをるが、人類は反對に邪道にのみ陷つて行くのです。今日の世界の現狀をごらんなさい。世界的不況不安を來してをるのは何がためでせう。その禍根を檢ぶれば、要するに飽くことなき貪婪な物質慾から發してをるのです。劇烈な經濟戰も關稅戰も根元を糺せばパンあるを知つて魂あるを忘れ、自國あつて他國あるを忘れた餓鬼道世界の暴露であつて、こゝに瞋恚の炎一つ點ずれば世界戰爭の二の舞を演ぜねばならぬことになるのです。

物質文明を野生的に放任するならば、苦の因を造る無明の道となり、人類は擧つて悲鳴をあげねばなりません。今日の世界的困迷はこの弊害を暴露したものであります。

涅槃經の中に少欲、知足、樂寂靜、勤精進等の八法が示されてある。この八法こそ現世界の禍機を救ふ唯一の鍵であり、平和の船を彼岸に渡す舵でありませう。

(三) 畜生道 (勤勞の修行)

本能欲にのみ生きる世界は畜生であります。食欲、淫欲、生存欲、それに殺されはしまいか、迫害されはしまいかといふ恐怖心、これが一般畜生の通有性となつてをります。

登山十界の觀念では重きを負ふて喘ぎつゝ進み行くのを畜生道の表示としてあります。帶を解かず、着のみ着のまゝゴロ寢をしたり、口も嗽がず顏も洗はず、飯を食ふのも畜生道の表示としてあります。

業務に怠けてゴロ〳〵してゐるものをカラダヤミと世間で申しますが、勤勞を厭ふ心は遊惰徒食の徒となり、終に畜生道に退墮して始末に負ひぬ人間となるのです。

路ばたに馬頭觀音と刻りつけた石碑がよく立つてをる。何の爲めに立つてあるかを知る人も考へた人もタントあるまい。馬の死んだ供養碑か道中安全の標示位にしか考へまいと想ふのですが、それ程今日の人々は過去に對して認識を缺いてゐるのみならず、大切な指導物を叢の中に打ち捨てゝ置くのです。

途中でグズ〳〵ブラ〳〵遊び怠けてゐることを「道草を食ふ」と申しますが、馬を放つて置くと丁度それなのだ。そうゆう者に限つて我慾が深く、一寸のことでイガミ合ふのです。そうゆう人間は正しく畜生道に陷つてをるのでありますから、それを救はんとの善巧方便に馬頭尊を危險區域などに祀つて道行く人を戒しめてあるのです。馬頭觀世音菩薩は畜生道を救ふ施無畏の教主でありまして、人間の畜生性たる貪婪心、遊墮心、鬪爭心を摧伏して大悲心、精進心、勇猛心に轉換せしめて、拔苦與樂、轉迷開悟を得せしめんとの大慈大悲の救世主であるのです。

仕事に怠け、苦役を厭ふては社會の落伍者となるは勿論、山に入つて終に山頂を窮めずして途中から引き返さねばならぬことになる。

山登りにはリュックサックなり何なり背負ふて喘ぎながら一意專心、嶮岨を攀ぢて頂上へと目指す——畜生の遊惰苦役を克服するのであります。

勤勞なくして收穫は得られない、奮勵精進なくして向上發展は期し難いのであります。「君は寒流を汲め、吾は薪を拾はん」といふ風流三昧な詩句がありますが、峯中修行に採薪汲水の行があつて山中に於て勤勞行をするのです。

强慾無道を離れた勤勞といふものは尊いものでありまして「資生產業皆是れ佛法」と申して佛敎に徹すれば鍬鎌執る農業も、ソロバンはぢく商業も、人事百般あらゆる業務皆是れ佛作佛行となつて日々の業務に法悅を感じ感謝にひたることが出來るのであります。

然るにお互が本能慾を追求して我慾をのみ達せんとしますので世の中が亂れ、對立相剋を來し、自分をも社會をも畜生道に墮落せしめて、イガミ合はねばならんことになるのです。

（四）修羅道（精進の修行）

修羅は鬪爭の世界を云ふのであります。何物をも敵視してこれと爭ひ、倒さうと負かさうと狙つてをる世界をいふのであります。

人を押しのけて、自己獨り勝たんとせば排他抗爭となり、流血の慘事をも惹起するのであります。然し乍ら競爭がなければ進步はないのです。競爭が抗爭となり、鬪爭に陷らぬためにはファインプレーの精神に基かねばならぬ。精進努力の精神に轉換せねばなりません。排他の心あつては修羅鬪爭の世界に墮するのであります。他人の優れることを喜びの目を以て眺めると共に自己を磨きて、これに劣らぬやうに努力する。入峯登山に於ては疲勞を耐えて弱音を吐かず、亦人に遲れて迷惑をかけぬやうにと勵む、これが精進行に當るのであります。

元來、鬪爭は何より起るかと云ふに、それは瞋恚の心から起る。「瞋恚は猛火よりも甚だし」と云はれ「功德を劫むるの賊なり」と云はれ、兵法には「慾兵必ず敗る」とあつて自己の慾望を遂げんとする腹立ちまぎれの戰は必ず敗れると云はれ、又「短氣は損氣」と申す如く、嫁と姑の喧嘩から火を發して一家を燒き拂ひ、牛小屋の牛が飛び出して隣國に駈け込み、終に國と國とが大戰爭になつたといふお話が經文に載つてをります。

けれども小我や我慾を離れた道のためには大に腹立たねばならぬ。父の愛の拳は子供にとつての

教訓となり、不動明王の降魔の利劍は煩惱の降伏となるのであります。

日東の快男子、一たび劒を揮つて滿洲の匪賊の首を刎ねる、これ膺懲の慈悲であり、正義の忿怒であり、無我の大道である。これを武士道又云ひ、軍人精神と申すのであります。歌に

爭ひの、握りこぶしも開くれば
可愛と、なづる同じ手の先

と、ありますが、瞋恚が慈愛となり、鬪爭が精進となればニコ〳〵顏の大黑天となるのであります。福の神といはれる大黑樣は、手に持つた槌を以て足下の玄米を搗き、脊中の袋へツメ込むと云ふ意味を表はしてをる。

米は搗けばつく程、靑光りすると云はれ、米篇に靑と書けば精である。精力を出して努力するのが精進であつて、人生の目的理想に達せんがためには、お互がニコ〳〵し乍ら一心亂れず精進努力せねばならぬのであります。そこに福が舞ひこみ、開運出世して一家が榮え、社會が榮え、人類が榮え……共存共榮の實が擧がるといふことになるのです。

(五) 人道 (抖擻の修行)

懺悔の心は良心を有つ人の心である。思惟道德の世界であります。この世界には智慧が備はつてあるから、自づと物事を思惟し考へる。そこに道德が行はれ、宗教心が生じます。恥を知り罪を知る心は人間の心であるのです。

懺愧懺悔六根清淨……と唱へながら、高きへ高きへと向上の一路を辿る。これ眼耳鼻舌身意の六根の穢れを拂ふ抖擻淨心で、止惡修善の人道行であります。懺悔の心より發する衷心の叫びであります。懺悔などゝ云ふと、今時の人々は何となく卑怯のやうに心得てをりますが、未だ懺悔の眞意義を知らない人であり、憐れな心の持主であると云はねばなりません。左樣な人は貪瞋痴慢に陷つて覺悟の期がありません。

人生僅に五十年、朝露の如き果敢なき現世に生れて、いろは歌の如く、人生の無常を覺らず、淺き夢を見てをつたのでは、ほんとうの自覺、ほんとうの覺醒は到底得られぬのであります。懺悔なければ道心起らず、道心起らずば一生醒生夢死に終らねばなりません。

人間お互は元來横着であり、わがまゝであつて、金でもタマリ、地位にでもアリツクと直ぐ慢心を起す、人を人だとも思はぬやうな大きな顏をしたがる。何か一大衝動にでも遭はないと反省出來ないものである。

峰中行事の中に「覗き」といふ行があります。白雲とぢ込めた千尋の絶壁から半身を突き出して訓誡する行であります。懺悔をさせる行であります。こゝでは驕慢心も惡心も退散し、縮みあがつてナンマンダ〳〵といふことになつて、自つと瞑目合掌することになるのであります。合掌のうちにこそ自ら菩提心は芽生へるのであります。

（六）天　道（歡喜の修行）

天上は歡喜の世界であります。歡樂無垢の世界は常に自己の心中が美はしく音樂的であつて、何物に對しても美はしい見方をいたします。

炎熱や疲勞に耐えて頂上に辿りつき、今迄苦んで登つて來た溪間を眺め、或は白雲を踐んで日出日沒の莊嚴な光景に接し、峰の淸嵐に潤達たる眺望を恣にした時の歡喜は、山に登つた人にして始めて味ひ得る歡喜でありませう。五色の雲に乘つて實に羽化登仙の思ひがするのであります。吾等の人生に於て苦痛を克服して之を超えれば、愉悅の境に達し得るのであります。「山と谷」に曰く

人篇に谷と書けば俗である、人低き便利のところに住せば遂に俗物と化し終り眞に向上の理想を失ふに至る。

人篇に山と書けば仙である、人山頂にのみ住せば遂に仙人となり終り社會に入りて活動し得ざるに至らん。

谷に居て理想の山を忘れず、俗を去りて山に入り、或は山に於て仙となり終らず、淸められたる理想の光を谷に持ち來すに於て初めて意義がある。

と。山頂に於て味ひ得た法悅を行住座臥、心にたもつたならば正しい明るい生活が必ず實現し得るでありませう。

×　×　×

十界を二つに分けて六凡四聖と申します。以上述べた六道は凡人道であつて、無明煩惱が根本となつてをります。この無明煩惱を光明に照らさうとするのが以下述べんとする四聖、卽ち君子道の修行となるのであります。

殘忍無道の心は地獄に通じ、貪慾にして吝嗇の心は餓鬼に通じ、淫逸亂倫な心は畜生に通じ、怨憎排他の心は修羅に通じ、恥を知り恩を知るは人間の心であり、富裕歡樂の境界は天の心であります。ケレドモ歡喜悅樂に登つたからとて永續するものではない。地獄にも畜生にも轉落するのであります。この六道世界は未だ佛敎修行に入らざるため因果の道理に暗く、ために迷夢にさまよひ、輪廻（りんね）を繰り返す分際なのであります。

出羽の湯殿山に參りますと、淨土口から間もなく長い斷崖絕壁に差しかゝるのでありますが、この絕壁は六道の行場とされ、昔は錢六文を捨て、六字の名號（めうごう）を唱ひ乍ら六道解脫（げだつ）を念じた所で、御寶前は大日如來の淨土とされてあつたので、淨土口の野原に荷物から財布まで置き、ワラジを履きかへ、死人の姿よろしく六文丈け持つたまゝで、赤裸々な心で淨土詣りをしたのであります。今日は鐵の鎖や梯子がかゝつて、左程困難を感じないが、昔はそんな便利なものはなかつたので命からがら此の難所を上下したのですが、こゝでは落したものは絕對拾つてならぬ掟があつた。それは何故かと云ふに、こゝは解脫修行の行場であつて、慾望などの起すべき場所でないとされたからのことで、そこには一文錢が砂利のやうに溜つて居たといふことであります。或年私が此の山に詣つた時、出合はせた羽黑の何とか云ふ神道敎會に附屬する先達行者が團體を引率し乍ら物語る話を聞く

に「昔の坊主は賢くて、おまけに慾が深かつたから錢を撒かせて置いて拾はせぬ口實をつくつたのだ」と坊主排斥の宣傳を一席やつてをつたが、それは全然的をはづれてをるのみならず、それにも増して今日此のお山が非難の聲高きに鑑み、大に肅正戒慎せねば累を神威に及ぼすものありと感じたことであります。かういふ論法でいつたなら、神社の前から賽錢箱を徹廢しなくちやならぬことになりませう。何事にあれ認識不足な臆測から出た推論ほど事を誤り、他を毒すること甚だしきはないのであります。

金剛般若經の偈に「若し色を以て我を見、音聲を以て我を求めば是の人邪道を行ず、如來を見る能はず」とありまして、形や姿や物質を以て神佛を見たり、聲や言葉を聽いてそこに神佛を求めば邪道に陷つて神佛のほんとうの姿を見ることは出來ないぞ、と誡められてありまして、心靈を透して眞理のうちにこそ神佛のほんとうの姿は見ることが出來るのであつて、物質的な見解や、我見我執の自分勝手な目を以ては到底神佛は見ることは出來ないのであります。

物質を離れ、我慾を捨て、我見や我執を去り、無我な心となつて心眼を開いてこそ始めて神佛の姿を見、神佛の音聲を聞くことが出來るのであります。

（七）聲聞道（聞法の修行）

聲聞とは敎を聞いて自ら悟り安心を得ることであります。

登山に先達といふものがある。今日は山の道案内者を左様申してをるのだが、本來は山の先規に通達して登山者を敎化する導師を先達と呼んだのです。心鑑抄に「大先達に逢はずんば、何すれぞ無明の衆生、自心を明すことを得んや」と云ひ、亦「これこの大先達とは、よく三世の因果を明了して諸人に先達すること自在なり、大乘の般若を以ての故なり」と申してあります通り、因緣の道理を究めた大智慧を以て人々を敎へ導く人を大先達と稱したのであります。山の道路だけでなく、山の掟、山の歴史、山の宗敎に通達して始めて山先達と申して然るべきであつて、山に入つて山の心得を知らず、亦人を導く力もなくては道路の案内者であつて先達ではないのであります。

楞嚴經に「娑婆の敎體は音聞より始む」とありますが、山に入り現地に就て講話を聽くなり、宿々に於て法話を聞くことは修養上大切なことであつて、迷ひの因果、覺りの因果の敎ひを受けてこそ悟りが開けてゆくのです。

人生の山道を登るには、どうしても先輩識者の指導敎化を受けて心得を聞かねばならん。

智度論に「佛法の大海は廣しと雖も信を以て能入とし知を以て能度とす」とありまして、佛門に入るには渴仰心がなければならず、次には修養心がなければならん。修養するには聞、思、修の三階段をふまねばならん。「聞」とは善知識に就て道理を聞くことであつて「學ぶ」といふことは聞くことが肝要で、聞かずしては道理のわかりやうはない。山に入つて修養せんとせば先づ先達の指導を受けて修行の心得を聞くことが大切であります。

（八）緣覺道（觀思の修行）

緣覺（えんがく）とは緣に觸れて自ら覺ることを云ふので、亦獨覺とも申します。

覺りの機緣は種々ある。敎を聞えて覺るものもあり、飛花落葉、風雲の浮動、流水の音聲等を緣として覺るものもある。

ともすれば思はぬ方にうつるかな
心すべきは心なりけり

と、明治大帝の御製にも拜します如く、コロ〳〵と迷ひ轉ぶのが心でありまして、正しいところに落ちつくまでには、仲々骨が折れるのであります。入峯登山の行に於ては、山籠りをして沈思默考するとか、山頂岩窟に踞して靜思座禪するとか、山の囁く沈默の語を味得する…山靈に觸れて感應を得る時、忽然として迷夢から覺めて無明煩惱を克服する…。

孔子は「學んで思はざれば則ち罔（くら）し」と云はれたが、佛法の修行は觀念工夫が肝心であつて「水澄めば水底明かなるが如く、心澄めば心源淸やかなり」で靜思沈默といふことは、修養上大切な項目の一つであります。修養の三階段の二番目の「思」がこの靜思行に當ります。

また諺に「書は讀むべし、讀まるゝこと勿れ」と云はれてゐますが、千萬遍口に書を讀み經を誦すとも身に活讀しなければ何の益もない。「學者學に讀まれる」といふことを申しますが、何ごとにあれ、物ごとに促はれてゐる間は轉迷開悟は得られぬのであります。

ヨク考へて見ますと、神も佛も天地を離れては存在しないのであります。そして天地は吾等に取つては一大學校であり、萬象は皆書籍である。心眼を開いて觀じますならば、天地は一大妙法であり、森羅萬象は皆一切經であるのです。この邊の道理を修驗道では「當相卽道、卽事而眞」と說き「無相三密」と說き「卽身卽身」といふことを申します。けれども「偏計所執」と云つて我見に促はれますと天地の眞の相は見られぬ。佛敎とて元より釋迦如來の勝手な私見ではない。聖德太子が申された如く「人造の私則に非ず」で、要するに天地自然の妙理を說き明かされたものでありますから、佛敎が必要だとか、不必要だとか、彼れ此れ申しますのは恰かも魚が水を必要だの不必要だのと議論するのと同じこと、實は笑止千萬な話であるのであります。

トカク佛敎を異端視して仇敵のやうに想ふ人があつて、そうゆう側の人達のオキマリ文句を聞くに「印度を見よ、支那を見よ」とよく申します。印度や支那が一時佛敎の盛んな國であつたがために今日の樣な悲慘な有樣になつたとでも見當違ひをしてをるのだらうと存じますが、それは印度や支那の歷史や國情を考へず、傳統や國民性を考へず、從つて大乘有緣の國家に非ざりしことを知らず偏屈固陋な獨斷や對立意識や、商賣がたきな色目鏡で見た見解であつて、若し日本國家に取つて有害無益な敎であつたなら、一千三百年の長い星霜を閱せずして、とうの昔に消滅すべきは當然であつた筈だが、今日一部の策動家や反動思想家乃至共產主義者によつて、タヤスク排擊されるやうなソンナ貧弱な敎ではなく、殊に明治維新に一部策動家と役人の合作により王政御一新の潮流に乘つて、あれ程佛敎排斥の動亂を起しながら、坊主懲膺にはなつたか知れんが、佛法排斥は失敗に終つたのみならず、而かも唯物史觀や巧利思想の風靡を來し、その罅隙に乘じて共產思想の跋扈を招き國民思想の混亂動搖を招來し、思想國難を叫ばしむるに至つてヤット敎育の缺陷に氣付き、宗敎敎

育を云々しながら、まだ迷つてゐるではないか。而かも時勢は今や愈々益々佛敎の必要を痛感するの現狀を來しつゝあると云ふことは抑も何を物語るものであらうか。苟も經世家を以て任ずるもの深く〳〵將來を考慮せねばならんことでありませう。恐らく後々の笑ひ草となるであらう彼の弘法大師の作にかゝる「いろは歌」を「いろはに、ほへと」と讀ませて國民を瞞着し來つた明治の敎育を何時迄續けんとするのであらうか。國民敎育は今や重大な岐路に立つものと私は信じます。

何時やら先年福島市の某本屋の店頭で「神佛鬪爭史」と云ふ掲示をチラと見たが、その內容はイザ知らず、恐らく「人間鬪爭記」ではなからうかと想像したことであるが、神佛の鬪爭だなんて、そんなことこの世にあるべき筈はなく、日本にそんな歷史のありやう筈もないのであります。若しそれ「敬神」の名にかくれ、官吏の地位を利用して敢て非理專橫を逞ふせんとする蠹賊あらば、國家のために大に戒めねばなりません。

大道長安仁者の開かれた觀音救世敎々團第二世となられた某文學士は、曾て熱心なクリスチヤンであられたが、大の佛敎厭ひで、何とかして佛敎をヘコマしてやりたい、それにはどうしても一通り佛敎々理を調べねばならぬと研究を始めた。ところが調べれば調べる程、深遠な敎理であつて、クリスト敎などの當底足下にも寄りつけないことを悟り、大に懺悔をして、翻然佛門に入り終に第二世と仰がれたといふ話は有名な事實であります。

キリスト敎の救世軍の人達が、よく路傍宣傳をやつてをるのを私は三十年も前からチヨイ〳〵立ち聞きするに、明治初年に佛敎徒から論難攻擊されたのがクヤシく思ふことかどうかは知らんが、昔も今も廣い東京は勿論、この狹い福島でさへも一樣に坊主攻擊の惡口三昧には驚くのである。「左の頰を擲られたなら右も出せ、石で叩かれたなら綿で拭いてやれ」と敎へるキリストの敎が、其敎徒によつて人身攻擊に墮落するとは時世時勢とは云ひ、あまりにあさましいことではないか、これもあれも皆末世の世相ではあるが、楯の兩面を見ずして半面の皮相丈けを見て得たりとするは現世一般の通弊でありませう。

法は信ずべし人は信ずべからず。と申しまして、佛敎には四依法といふ定規があつて「法に依て人に依らず、義に依て語に依らず、智に依て識に依らず、了義に依て不了義に依らず」と敎へられてありますから一概に坊主その人を見、その說を聞いて佛敎そこにありと忖度したならば、トンデもない誤謬に陷へる憂ひがあるのであります。殊に神や佛をダシにしてアノセ、コノセと無智な人々を怖がらせ迷はせして害毒を流してをる出駄螺目行者、山師行者等のインチキ者や、ハテは近來流行の氣狂ひ題目行者を信心者、祈禱者と心得て行者道これなりと想ふたならソレコソ、トンデモナイ認識不足、雲泥の感違ひと云はねばなりますまい。

世間一般が宗敎的敎養がないために、吉凶禍福に就ては頗る晦冥であり、轉倒夢想して當惑混迷してをるのでありますが善因善果、惡因惡果が吉凶禍福の根本原因であつて、因緣の道を離れて何物もないのであります。

信仰の極致は祈禱に歸着するのではあるが、因果律の軌道を逸して目標を過り、自我に執着して懺悔發心の至誠もなく天狗痴慢の虜となつたなら、これこそ祈禱に名を假つて邪道を行ずる惡魔で

あると云はねばなりません。

さて又次には我國體が佛敎と合はないかのやうに考へてをる一部國粹主義者のあることに就て一言申さねばなりません。

そうゆう側の見解によると、佛敎の無差別平等觀がいけないと云ふ、それは佛敎の平等卽差別、差別卽平等の眞髓に徹しないからのことで、愛國思想と平等觀念とは決して齟齬する筈のものではないのであります。實は平等觀に徹しない愛國思想こそ危險極まるものであつて、この實例を現時の支那に於ける打倒日本の抗日思想に見ることが出來るのであります。日本人も支那人もソ聯人も平等だなんて、そんなヘマな平等說を佛敎では元より說いてをらぬと共に、日本人、日本人とその矜持を强調し、その意氣を昂揚するは如何にも結構だが、如何にありがたい尊嚴なる日本國體だからと申しても、日本人の中に支那人にさへ劣る者が絕對居ないと誰が保證出來やう。國粹の强調は必要でありますけれども、獨粹に氣付かず獨斷や獨善に陷へることを警戒せねばなりません。理論や辯明はヌキにするが、過去の歷史と事實に徵して見ればよくわかるのであります。

佛敎渡來當時これに反對した馬子は、皇室を蔑にした非行の多い人物であつたと共に、佛敎の支持者であつた彼の蘇我氏の專橫を憤つて之を亡ぼした藤原鎌足は、佛法信者であつて山階寺や多武峯を創立してゐることを知らねばならぬ。天人共に容さゞる僧道鏡の惡逆を懲した和氣淸麿は、高雄に神護寺を建てた崇佛家であり、その子は傳敎大師と心を合せ比叡山に鎭護國家、民心肅正の一乘戒壇設立に心膽を碎いた國家革正の愛國主義者であつた。菅原道眞も、北畠氏も、楠公も、二宮翁も大の佛法信者であつたことを顧なければならんのであります。

日本人だからとて、そのなかには支那人に劣るものもあり、又神主や坊主や山伏の中にも隨分下劣漢も居るのであるは勿論、佛敎信者と稱するものも必ずしも佛敎信者とは申されんのであつて、吾等は藤原鎌足や和氣淸麿や菅原道眞、北畠氏、楠公父子、二宮尊德等の忠臣傑士、先德偉人に眞の佛敎信者を發見すると共に、ソロモンの榮華も谷間に咲く白百合の花に過ぎざる如く、邊鄙なる田舍の茅屋のうちに、生きたる菩薩を往々にして發見するのであります。

日本佛敎の開山たる聖德太子は神、儒、佛の三道を一貫する皇道を闡明せられ「これこの三法は天極の自有にして人造の私則に非ず、皇政を導き國家を治め、人情を正ふし、黎民を善くするの實物なり」と示し玉ひ、且つ「然りと雖も其一に通ずるものは知らざるを以ての故に、其他を非して有に非ざる者はそれ妄物なりと謂て互に誹謗し、交々嫉妬す、學還つて邪となり、法還つて妄となる、是れ聖を破り政を破るの大罪なり」と誡められ、又この三法を弘めらるゝに當り、趣意四節ありとせられ「一に長く實祚を堅めんとす、二に萬國を安くせんがために、三に覺路を開かんとす、四に群邪を擊たんがために」とその御本誓を明かされてをります。又　後宇多法皇の御遺詔には「夫れ以れば我大日本國は法爾の稱號、秘敎相應法身の土なり、故に我が後血脈を繼ぐの法資、天祚を傳ふるの君主、盛衰を同ふすべく興替を伴にすべし、我法斷廢せば皇統共に廢せん……」と諭させ玉へし程で、吾皇室と佛法との御關係はあまりにも赫々たるもので、其他　嵯峨天皇、亀山天皇、後醍醐天皇等の御遺詔を拜しますれば思ひ半に過ぎるものありと存じます。

たいへん横道に入りかけましたが、羅漢と云ふ佛様のあることを御存知でありませうが、前項で述べました聲聞とこの緣覺とが、羅漢の位で四諦や十二因緣の道理を悟つて佛様になりかけた位、即ち辟支佛といふのが羅漢のことであります。生きる、死ぬるの問題をハッキリと悟つて生死解脫を得たのが阿羅漢果と申すのであります。今一息で大乘の悟りを得やうとする大切な境目に立つので、この聲聞と緣覺を小乘の悟りと申して小さな乘物にたとへてをるのであります。自分さへ乘物に乘つて終へば、人は乘らうが乘るまいが、一向かまはぬといふ利己的な悟りで、利他心の起らぬ個人主義的な悟りであります。印度や支那にはやつた佛敎は、大體これであつたのであります。ところが大乘の敎へは大きな乘物で、何物をも乘せやうとする大慈大悲の利他心の敎へであります。

(九) 菩薩道 (奉仕の修行)

菩薩とは大道心覺有情と譯しまして、自己を利し他人を利する覺者、云ひ換へれば大仁者、大聖人を指すのであります。

布施とて慈善行をする、持戒とて戒行をたもつ、忍辱とて耐え忍び、精進とていそしみ努め、禪定とて靜思默考し、智慧とし正法を學ぶ、これを六波羅密と申して覺りの彼岸に渡す船に譬ひ、これを實修するのが菩薩の道であります。前に述べた事柄は、何れも菩薩位に到る修行に非ざるはないのですが、特に自己を空ふして他のために盡すは菩薩道の特徵とするところでありまして、これやがては自己の完成となり二利圓滿して佛位に到達するのであり、これを實社會に活現せば共存共

榮の實を擧げることになるのであります。菩薩道には犧牲的精神が伴ふのでありますから、所謂奉仕に當るのであります。

上求菩提、下化衆生と申しまして、上は佛を求め、下は凡夫を導き、眞に無我の心となつて自己を淨化すると共に世間を淨化するのが菩薩であります。菩薩の心は小さな我といふ心を離れたる大きな我の心です。社會、國家、人類とだん〳〵慈悲の心をおし廣め、大きな手をさしのべて、心で心を結び合ひ眞實なる和合の生活を實現するにあるのです。坊主のことを僧侶と申しますのは、和合のなかまといふ意味で、菩薩の心を心として生活してゐる人をいふのであります。菩薩の心は算盤とりて商賣するにしても、二宮尊德翁の云はれた如く「賣り手喜び買手喜ぶ」歡喜の心となり「今日も亦働かねばならないか」といふ心を轉じて「あゝ有り難や今日も達者で働くことが出來る」といふ感謝の心とならねばならんのです。

菩薩の心は暗夜に自分の躓いた石を除ける心であり、また躓く人もあらうと誰も見てゐぬ暗夜に石を持ち上げて、みちばたへ除けて置く隱德の心でなければならんのです。山岳道場には賽の河原といふところがあります。そこは石ころの多い場所で、こゝで登山者に石を一つ宛道ばたに片付けさせて菩薩心を換起せしめるのです。六道能化の地藏菩薩の慈悲心を起こさせるのです。

菩薩の心はほめられやうの、喜ばれやうの、恩返しを得やうのといふサモしい根性ではないのです。德富蘇峯翁の言に

「與へたる者は善く忘れ、受けたる者は善く覺えるは人間道の原則だ。若し受けたる者は善く忘れ

與へたる者は能く覺えるが如きあらば、そは人間道の逆行だ。受くる者より與ふる者は幸福だ。されど受けたる者が其恩を記し、其恩に酬いるは更に幸福だ。忘恩に至りては恐らく惡德中の最大惡德であらう」と蓋し至言と云はねばなりません。

山に登つて靈場の清掃美化作業をするとか、いばらを切り拂ふとか、道標を樹てるとか、或は道を拓き橋梁を架けるとか、場合によつては疲勞困難せる者を助けるとか、利他化益の精神を發起するのが、この行に當てはまるのであつて、皆善根功德を積む菩薩の大慈大悲心の奉仕行であるのです。

菩薩の内にも大乘の菩薩あり、小乘の菩薩あり、上りて佛果を證する菩薩あり、佛位を辭して菩薩に下る菩薩ありで、佛敎の内には數多の菩薩を說き示されてあるが、その内でも世間に馴染の深いのは觀世音菩薩でありませう。これにも千手觀音とか、十一面觀音とか、如意輪觀音とか、密部の觀音樣がありますが、何れも救世の菩薩で、世相を自由自在に觀察し迷ひを轉じて悟りを開き、惡を止めて善を行じ、苦を拔き樂を與へる大慈大悲の心に徹した菩薩中の菩薩で、吾等の手本として崇めねばならぬ菩薩であります。加賀千代の句に「朝顏につるべ取られて貰ひ水」といふのがあり、一茶の句に「やれ毆つな、蠅が手を摺る足を摺る」といふのがある。何れも菩薩精神の一面を吐露した發句でありますが菩薩の精神こそは、あらゆる角度より眺めまして吾等の手本として最上のものであるのであります。

菩薩の精神は社會生活に於ては最も充實せしめねばならんのでありまして、山修行に於ては特に種々なる行法があつて、この精神を吹き込むのであります。

菩薩行は修養の三階段の「修」に當ります。「聞」を「思」に仍て錬り「修」によつて躰驗するのであります。「耳に聞き、心に思び身に修して、やがて菩提に入相の鐘」で、何事によらず聞く丈け、考へる丈けでは足りません。之を實修躰驗して始めて功果が現はれるのでありまして、それが奉仕行となつて現はれてこそ眞に意義あるものと云はねばならんのです。

(十) 佛道 (報恩の修行)

佛とは自覺、覺他・覺行圓滿と申しまして覺りの頂上であります。佛と云ひ神と云ふ眞理の體現者であり、亦眞理そのものを指した名稱なのです。佛と云へば死んだ人を云ふかの如く心得てをる人が多いのでありますが、この概念は大に是正せねばならんと存じます。

佛の道は消極的に云ふと、解脫であり、積極的に云ふと慈悲である。佛敎の敎理はと云へば因緣の二字につきるのです。

因緣の道は、どうすることも出來ぬものだから泣き寢入りに諦めよではない。屈從せよではない。因果の道理を知り明に之を認めて、先づ第一自己を救ひ、更に衆生を救ふべき原因をつくれよと敎へるのが佛敎なのです。

解脫とは無我の道理を悟ることである。然し悟つた丈けでは消極的で逃避のそしりは免れません無我の悟りが佛心となり、慈悲の行となつて積極的に働く時、そこに精進、犧牲、奉仕のかたちと

なつて現はれ、解脱がそのまゝ衆生救濟の行とならねばならんのです。

よく考へて見ますと、吾等は自分で大小便をして置き乍ら、それをすら、どうすることも出來ぬと云ふ無力な、わがまゝな代物である。それを文句なしに片付けてくれる百姓に救濟された恩を感じねばならぬわけなのです。

慈悲心といふものを躰得すれば一擧手一投足も、それが救濟行となるのであります。水の流れ、花が咲き、米實るところに皆ありがたい慈悲心を感じます。この五尺の肉躰がありがたい法に催ふされて咲き出でたる蓮華であると知つた時、感奮興起してその大恩に報じなければならんのです。

我等は神佛の恩、國王の恩、父母の恩、天地一切衆生の恩卽ち森羅萬象あらゆるものの恩を受けてをるのでありますから、これらに對して感謝報恩の精神を充實せしめねばならんのです。

山頂に登つて遙か東天に向ひ皇居を拜し　天皇陛下の萬歳を唱ひ奉り、國家の彌榮えを壽ぐ、朝日夕日を拜しては禮拜合掌する。或は諸神諸佛の靈場を禮拜勤行する等、皆これ至誠報恩の行であつて、所謂四恩報謝の修行であるのであります。

日本人から感謝報恩の精神をぬき取つたならば、それは恐らく國家の破滅であると覺悟せねばなりません。

【三】山駈けの意義に就て

……（一）……

諸々方々と神社佛閣や札所廻りをして來たことを駈けて來たと稱し、三山を駈けて來たとか奥駈けをして來たとか、昔からお山駈けといふことを申すのであるが、サテ駈けるといふ言葉の內容や起原を承知してをる人は、恐らく日本國中にも澤山はあるまいと存じます。

この言葉の濫觴は修驗道から出て來たのであります。古來から山伏專用の觀を呈してをる法螺は密敎の法貝として秘密儀軌の中には、特に印像までも示されてあるが、早くから吾國に傳はり山伏と云へば法螺貝を聯想する程實は切り離すことの出來ぬものとなつてをるのであるが、山駈けの意義を說明するには兩者の關係を解けば自ら明かとなるのであります。山伏の法貝衣體を一々說明すれば修驗道の全敎理を說くことになつて容易なことでないが、その衣體卽ち裝束の內に引敷といふものがあります。これは本來獅子の毛皮で作るのが本位であるが、仲々容易なことで手に入らないから大和地方に棲む或る獸の毛皮で出來てをつて入峯修行の時に、腰に付けて座具に供するのであるが、これは獅子乘と申して山伏自身が獅子に乘つたといふ觀念を象るのであります。ツマリ山伏が獅子に乘つて山野を駈けるといふ趣向なのでありまして、殷々と吹き鳴す貝の音は獅子のうなり聲に象るのであるから、山伏の吹き鳴す貝の音は獅子吼することに云ひ換ひれば大說法をするといふ意味になるのであります。ですから法螺は出駄螺目に吹く法螺卽ち駄法螺を吹く道具ではないのでありまして、昔も今も同じこと山伏の意義も心得ず修行も積まず法螺の吹き方も相承せず、出駄螺目に貝を吹く者簇出したので、これを駄法螺行者と稱したのでありますが、それが世間語に轉用されてをるのであります。

然らば何故に山伏が獅子に乗つたと觀念し、法螺を吹いて獅子吼說法に擬しながら山野を駈け廻るのであるか、それには然るべき由來がなければなりません。

同じく猛獸でありながら虎は獰猛であつて虎視耽々などと形容せられ、倒さう、負かさうと狙つてをる猾智に長けた貪婪な强慾無道者に引き合ひに出されますが、獅子は獅子奮迅といつて威勢そのものの權化とも云ふべく、正義のために無我の境地に立つて獻身奮鬪するやうな場合に引き合ひに出され、獸類の王と崇められてをるのであります。そして、その毅然たる姿なり、嚴然たる態度なりが如何にも正義そのものを堅持して敢てゆづらざる王者たるの威嚴を備ひ、何物にも屈せず何事にも動じない勇猛の氣象と奮迅の勢を示してをります。

佛敎の中には如來の神變力、神通力、奮迅力、勇猛力といふ風に力波羅密のことが至るところに說かれてあつて、法華經の第二十五の卷たる觀音經の偈の中には殊更いたるところに念彼觀音力とあります如く、信仰の極致を力なりとしてをるのであります。この信念に徹したる力こそは何物をも壞ることの出來ぬ金剛力なのであつて、修驗者が開祖役の行者以來、信念力、神通力を尊んだのも所以あることで、古來法力によつて靈感を發得し、感應道交を得て不可思議なる威力を發揮した史實の枚擧に遑なきは、實にこれあるがためであつたのであります。

卽ち山駈けとは一切衆生の迷ひの寢りを覺し、覺路に導かんために獅子吼說法し乍ら獅子奮迅の信念を發起して信仰の山へと勇往精進して金剛の法力を修得することを意味するのであります。駈けるといふことは、ワキ目をふらず一心となつて直進する謂であつて法性眞如の山に精進して無明煩惱の怨敵（迷蒙無自覺な邪心）を降伏するのが山伏の本領とするところから山伏といふ名稱が出來た程でありますから、それには剛健不屈の意志と勇往邁進の氣象を要するは勿論、獅子の如き不動の意氣を以て何事にも迷はず一心となつて、信念力の發得に精進することになるのであつて、其信仰の心構ひなり態度なりを獅子奮迅の勢ひに譬ひて山修行を山駈けと申したのであつて、これが諸々方々とお詣りをして歩く熱心な廻行に通用せられ、駈けるといふ言葉が世間にはやるやうになつたのであります。又獅子は如何に獸類の王とは云ひ畜生であるからこれを無明（迷）に象どり人間は法性（悟）があるから、獅子に乗つた人間は無明を降伏したことにもなり、無明の迷闇を破つて法性眞如の光明をかがやかすといふ意味にもなり、無明あつての眞如でもあるから、無明卽ち法性煩惱卽ち菩提で、迷ひあつての悟りであるといふ佛敎の敎理を象つて獅子に乗つて山駈けの解脫行をすることにもなるのでありまして、密敎の修行や觀念には初重、二重、三重、四重と秘釋といふものがあつて敎理や解釋がその人の機根に應じて徹底的に深くなるのであります。

駈けると云ふことにも善駈、惡駈の區別もあり、駈相、駈別、駈越、駈駐などと、いろんな名目があつて山修行の次第が巧妙に示されてあつて、體驗的敎養の軌則が甚深微妙に出來てをるのであります。

又話はチト別になるが、伽藍の欄間などによく獅子に牡丹の彫物があります。獅子心中の虫といふ諺がある如く、如何に百獸の王と雖も腹に一匹の毒虫が湧けば命を取られると申しますが、牡丹の花には殺菌劑が含有するといはれ、虫に弱つた獅子が花に縋れる姿を彫つてあるのであります。

これは誠しめを表はしたものであつて、如何に元氣旺盛で奮迅の勢あらうとも、それが俗に云ふカラ元氣で大慈悲の至誠より發した中味のあるほんとうの勢でなく、貪瞋痴の三毒煩惱から發した傲慢無道な勢であつたならば、それが所謂獅子心中の虫であつて、終に身の破滅を來して野太張るかそれとも地獄の谷底に轉落することになるのであります。それ故花の如く麗はしい慈悲心に縋り、花の如く麗はしい慈悲の救濟に勇猛果敢であれよと敎へたのであります。その外六字文殊法といふ秘法などには八獅子の印像を示して十方の惡魔を降伏する信念發起の次第を明かしてあることや、神社の前庭にアウン開閉の二匹の唐獅子をまつることなどを始めとして、民間に行はるゝ獅子舞ひの如きに至るまで獅子を主體として密敎の敎化的秘趣が隨分各方面にいろ〳〵な形をとつて現はされてをるのであります。

山伏道の極意にチト觸れて申しますと、それは以心傳心の內證になりますが、無常迅速な現世に於てこの身この儘三大阿僧祇劫といふ永い永い年限を經たねば往生出來ないと云ふ未來成佛を一念で超へる修行法門でありまして、アといふ出息とムといふ入息との瞬間に一超直入の迅速さを以て煩惱卽菩提を證得する修行が建前となつてをりますから、それには心身共にドン〳〵駈足をしながら嶮難な山を蹈み破り、恰度皇軍が敵前に進軍する如き勢を以て煩惱惡魔を降伏して敵の牙城を陷へれ解脫の凱歌を擧げねばならぬわけであります。グズ〳〵してゐては迷ひの雲が押し寄せ、怨敵魔風が襲ひ來つて菩提の山は益々荒れて參ります。嶮難を克服するどころか、日暮れて道遠しの悔を遺すのみならず、僅か五十年のこの世の人生の山坂に於て進退谷つて地獄の谷底に轉落するやも

保し難いのである。

「切りむすぶ刄の下は地獄なり、身を捨てゝこそ浮ぶ瀨もある」てふ歌もある如く、山伏の修行を捨身の行とも申しますが、阿吽二息の呼吸の瞬間に獅子奮迅の神速さを以て嶮難の惡魔外道を降伏して一刀兩斷の佛果を證せんとするのであります。

何となれば、元より時間は無限ではある。然し無限の時間は過現未の連鎖であります。過現未は一秒の前後際であり、一秒時は宇宙の脈搏であります。

亦空間は無限ではある。然し無限の空間は十界の結網であります。十界は一念の迷悟際である。一念は不二の一滴に外ならぬ。一滴落ちなばそも如何。散る〳〵常住、咲く〳〵常住と。一超直入の極意、一刀兩斷的神速果敢の佛果卽ち捨身解脫はこゝにあるのであります。

(二)

由來修驗の法門たるや解脫の方途が體驗的であり、意志的であり、神秘的であり、靈感的であり法力三昧にありますために、日常祈禱三昧に入り信心の功德力を以て如來の加持力と法界の威力に冥合して入我々入の妙境に入り以て六根を淨化して惡業（前世から只今までの惡い因緣の業）を制し善果を得んがために理屈をヌキにして法力三昧に始終して解脫に專念することが建前となつてをるのであります。法力とか祈禱とか申しますと、所謂出駄螺目祈禱渡世者が多いために、一概に魔法か迷信のやうに世間から想像せられ、異樣な目を以て眺められてをるのでありますが、例へば正

統修驗者が古來專務とした御日待（おひまち）の祈禱行事に就てその行法の觀念內容を參考に明かさば、これは日輪禮讃の信仰行法であつて、赫々たる太陽の姿の中に慈光遍ねく六合（りくごう）を照し玉ふ　天照皇大神の高太なる神德を仰ぎ奉り、宇宙靈光の活現たる大日遍照の無上神格であると崇めつまり、この天地普遍の靈光の慈悲に惠まれて吾等心內の闇黑面たる煩惱邪迷を照し、以て神の子孫として耻かしからぬ日本人としての一心明朗圓滿化を圖らんとする信仰が所謂御日待の祈禱である。

一心明朗たり得てこそ一家も一國も明朗たり圓滿たり得るのでありまして、如何に大日本が有り難い太陽の如き明朗圓滿そのものの國柄であるとは承知してゐても、各自の一心が明朗たり圓滿たり得なければ國家は明朗圓滿とならんのでありますから、この信仰行法が曾て全國的に普及されてをつたのも實に理由あることであつて、この行事が國民的一般信仰行事として家庭の淨化は元より國民的信念統一上に如何に役立つたかは喋々を要せぬ事柄であつたのでありますがお日待なんて何の事やら、行者も一般民衆もサラリと忘れて終つて、今日はその內容が下落してをるのであります。

宗教方面の行事のみならず、あらゆる方面に涉つて今日程非理が通つて道理がひつこみ、事の趣意晦冥淺薄となり、不得要領となつて區々まち〳〵となつた時代はないやうであつて、これが自由思想とやらの影響であらうが、それがためにこそツマラン類似宗教や山師行者が出しやばつたり、功利思想や共產思想などが流行したりするのだらうと思ふのであります。このお日待の如きも宗教輕視の風潮により一般的には廢れて、行法そのものゝ權威さへも失はれてをるのであります。

然しこのお日待の信仰は本來敬神崇祖の行事であると共に、その內容は近來國旗を揭揚してこれに敬意を表し、以て日本人たるの自覺を換起せしめんための標目とする程度以上、一歩を進めた國旗卽自心の信仰行事であると云つてもよいのでありますから、國體觀念を深め一心の明徵と一家の明朗を計る家族本位の信念涵養上、民衆的信仰行事としては意義あるものであると思ふのであります。唯この信仰行事の行法に當る人そのものが、觀音の信仰に徹すると共に日輪觀、阿字觀或は三密觀などいふ密敎の敎理を心得ねばならんのであるから、識見に於て、信念に於て、將た亦敎養や人格に於て果して堪え得るかどうかが今のところ問題となりませう。殊に一家の內幕や個人の秘密にも觸れ、精神的不安以外人事に關する相談にも預る場合も少くはない點等に鑑みて、一般家庭に出入する指導行者としては最も大切な役目だからであります。

世の中には祈禱と云へば、一概に迷信なりとキメ込んでをる人もありますが、それは祈禱の眞意義を知らず、且つ信仰の醍醐味を嘗めたことのない人々の誤解であると共に、亦祈禱を手品か魔術か、それともマジナヒや催眠術ででもあるかのやうに思ひ込んだり、アノ瀨コノ瀨と神や佛の名に於て勝手に因緣付けることだと迷信してゐる不心得者も多いのであつて、出駄螺目行者やカッギ家の罪大なるものありと云はねばなりません。

苦しい時の神頼みとヨク云ふが、强い樣で實のところ弱いのが人間なので、苦しい時、悲しい時嬉しい時、大きな力に頼らんとし縋らんとし、感謝せんとするは人情の自然たるは勿論であります。それが因緣を諦觀して信ずる念ずるの心的態度を取つたのが佛敎で云ふ所謂祈禱なのであります。

或る歌に、

祈りても驗しなきこそしるしなれ
　　祈る心に誠なければ

とありますが、祈禱とは一心至誠に信念することであつて、清淨の至誠心を發し、清淨の至誠心を願ひつゝ眞心を强化して靈力を發揮し、惡因緣を解脱して善因緣を結果付けることを云ふのであります。

然しながら銘々お互は前世からの宿習といふものがあり、上根中根下根と別れてをつて善根功德の多少によつて人々の因緣に差別があるから運が惡いから、災難が多いから、病氣だからと云つて信心や祈りに無中になつたから、直ちに功驗が現はれるときまつたものではない。

勿論、盡未來際を期して惡の業因を打破し、これを變換せんとする菩提心種子撒きの淨化的信仰が祈禱であるとも云へるから、何時かは撒いた信仰の種子は生へて何等かの形で芽生えるに違ひはないのでありますけれども、腹がへつたとて飯を食つたやうに直ちに希望が充たされるやうな簡單なわけには參らない。それに、この世に生存する間は下根の人程日々十惡の何れかを連續的に犯してをるのであるから猛烈な善根を行ひ、或は正しき信仰に徹せざる限り仲々以て前世からの惡の因力を打ち消すことは出來ないのであります。

けれども、神佛の慈悲心には制限はないのでありますから提婆のやうな極惡無道の人間でも、猛烈な善心を起して惡を償ふて、阿羅漢果を得た實例もあるから恰度解毒劑を飲んで毒の力を相殺する

如く十の惡業力に對し二十の善業力を加へて、之を打破することは不可能ではないのでありますが、一心岩をも透す至誠がなくては容易に出來るものではないのであります。

(三)

天地宇宙卽ち法界の神秘力といふものは誠に不可思議なものであつて、響の聲に應ずる如く天佑と云ひ神助と稱するもの、これ皆小我を離れた無我の至誠が、大我正義の妙境に徹して法界の神秘力に融合したところから發する靈應であつて、取りも直さずその事そのものが、祈禱の神髓となつて發揮せられ、信念力自體が天地神明に感通した結果を云ふのであります。

日露戰爭の際に、當時或る有名な理學博士が、

「今度の連戰連勝に就ては、天佑と云ふことを屢々人が云ひ、又新聞紙にも書いてあるけれども、それは私はヲカシなことゝ思ふ。天といふものは何であるか、或は神とも云ひ、上帝とも云ひ、其他種々名前はあるけれども、ソウ云ふものが人間の爭に關係すべきものでない。それは勝つにはやはり勝つだけの力がある——併しながら、實は負けねばならぬ場合に勝てることもある。又必ず勝つべき場合であると思ふのに、負ることもないではない。サウ云ふ樣な時の勝敗は全く天佑に違ひないと云ふけれども——たとひ偶然にしても、必ず勝ち得べき原因があるから勝てるのである。決して天とか神とか云ふものゝ佑けではない。さう云ふ考は未開的の考で、眞に知識の開けた人民にはサウ云ふ考の起るべきものでない」と云つた。

これに對し生き佛と稱せられて當時有名であつた雲照律師が、十善寶窟の誌上で次の如く主張せられてをります。要領丈けを申しますと、

「物質的一方に偏した卽今流行の學理から見たならば、如何にも盡理の說の如きも眞理に當らざる妄說である。殊に畏くも日月よりも明かなる宣戰の詔勅の冠首に『天佑を保有し萬世一系の皇祚を踐めて、これより甚だしき不敬事件はない。宣戰の詔勅に對し奉り、公然反抗を試みたるものであつる云々』と宣らせ玉へる前代未聞の宣勅、國民たるもの抽誠欽行、百世服膺して忘るべからざるの聖旨である。その身皇室の藩塀且つ國家の博士たるもの特に率先して宣旨を奉戴し、天神地祇の天佑を祈り以て國民を開導すべき天職たるにも鑑みず、かへつて嘲弄的の語勢を以て公然駁擊を試み反抗態度を表明して耻づるなきは不敬の甚だしきものである。抑も皇室の御先代を天神と崇め奉るは勿論、臣佐百姓の祖先も亦皇祖天神と共に降臨して經營した國土なればこそ、皇國を神國なりと稱し、國民信仰の基礎となし、萬世一系無比の皇室を奉戴し、皇祖皇宗を齋きまつるのみならず、神代の神々は申すもをろか、皇室國家に功勞ある聖哲臣佐に至るまで悉く敬祭し、其神佐を祈り就中官國幣社に對しては聖上躬親ら敬祭あらせられ、或は勅使を差遣し奉幣し玉ふことは、皆物質的以外人智の及ばざる所を之を幽界に仰ぎ、之を神靈に愬へ誠を致して其神助を仰ぎ、其天佑を祈らせ玉ふことそのこと皆國躰の基礎である。佞臣權を縱まゝにすれば惡神威を增し、忠臣位にあれば善神福を降す、神宣掌を指すよりも明である。國家良政を施し人民悉く宗教道德に厚ければ善神威を增して國家を擁護し、人民を冥佑し玉ふのである。蒙古來寇せし時の如き上下一致して天神地祇を敬祭し、神明佛陀の冥應を祈り、不測の天佑ありしことは誰か知らざる者があるまい。天佑否定說の如き學說の因て來れるものは、德川の中世から排佛毀釋の僻學者が出で、海內に蔓延した餘弊の現はれであつて、神明を侮蔑し天理を無視して憚るところなきは恐るべく歎くべきことである。楠公の軍旗の銘に『非理法權天』とある、その意味は非は理に勝つ能はず、理は法に勝つ能はず、法は權に勝つ能はず、權は天に勝つ能はずといふことであつて最後は天命、天道に勝つ能はざることを明かしたものである。されば天命を畏れ天道を貴び、天佑を仰ぐべきである。抑も皇軍が百戰百捷して一敗なきは、兵器人和にも因ることながら、そのことそのものも皇祖皇宗を始め聖天子の御稜威の賜であり、且つは武士道卽ち大和魂の効果である。大和魂なるものは一朝一夕に養成せられたるものでない。要を撮つて云ひば(一)天地開闢よりの國民固有の天性に加ふるに(二)倫常教育の効果と(三)宗教薰陶の効果が之を育成したのであつて、武士道の精髓たる義を泰山の重きに置き死を鴻毛の輕きに比し、從容として死を見ること歸するが如きは實に佛教の無我、無常の眞理の發揮である」と申されて種々なる史實を列擧して博士の蒙を啓かれてをります。

皇軍の連戰連勝の原因が、一二にして止まらざるは申す迄もないが、その根本は天佑神助の賜なりとして、而かも更に理論を進めますならば、若し戰爭の勝敗が天佑に主因すると斷じたならば、露國にせよ、支那にせよ、國民一致天神に祈り天帝に念じて勝たんと願ふ熱意は、敢て日本に比して劣るものではなからうに、何故に日本のみ獨り大勝を博するのであるか、何故に吾れにのみ天佑あつて彼れに天佑ないのであるかといふ疑念が起るのであります。こゝが實に肝心なところで「心

だに誠の道にかなへなば祈らずとても神や護らん」との歌の如く、仁道正義の誠の道を履んでの戰爭であれば、戰爭そのものが既に神事であり神業であり誠の道であり、天道そのものであつて、吾れ神と共にある聖戰なるが故にこそ、天佑冥助は必然たるべき道理なのであります。邪は終に正に勝つ能はざるは天地自然の理であつて、天道は善に福し淫に禍すと云ふ戒めは眞理なのであります。日本人には過去數千年來、其魂の奥底に神の眞心が薫染せられ、敬神崇祖の信仰力が培はれ、正義の觀念が植え付けられてをるのでありますから、一旦緩急あれば愛國の至誠天に通じ、無我の大道發揮となつて偉大なる力を現はすのであります。

これ要するに天皇が現人神でおはすが如く、天皇の赤子である國民も神の子孫であるが故に、云へ換へれば吾國が眞心の國であり、正義の國であるところの所謂神國なればこそ、國民擧つて至誠心の發露となり、神の照覽によつて天佑を蒙ることゝなるのであつて、それが亦上下一致、日頃朝となく夕となく神を敬ひ、佛を念じて魂に薫習し、信念を深め强めて眞心を養ふ慣習の絶えざりしお蔭であつて、一に皆神々の廣大無邊なる御恵みと、天皇陛下の御稜威の賜に歸するのであります。然るに何事ぞ、聖戰を單なる爭ひと見、且つ戰勝の結果を獨り人爲や偶然の賜なりとするとは、左樣な考へこそ實は未開迷蒙な非文化的妄說であつて、火力や物質力、生產力、經濟力等は實は第二義的なものであり、精神そのものが大切でありまして、透徹したる魂の國日本には當底通用しない歐米野蠻の皮相的見解であらうと信じます。

(四)

サテ佛敎中の密敎に於ける加持祈禱法に就て一言參考のために申しますと、大體四種に別れてをりますが、觀念法の次第が非常に緻密に出來てをりまして息災(そくさい)、增益(ぞうやく)、敬愛(けいあい)、調伏(てふぶく)の別があります息災といふのは明朗圓滿や平和を祈る祈禱法であつて、信仰の對照となる尊像は慈悲柔和な觀音樣のやうな佛躰を本尊とします。增益といふのは福德を增して、人々を饒益することで虛空藏樣のやうな福德門に屬する佛躰を本尊とします。敬愛といふのは君臣敬愛、夫妻朋友乃至國家和合を祈る法で、愛染明王のやうな佛躰を本尊とします。調伏とは降伏のことで、人民國家に災害をなす怨敵凶徒類の逆惡暴戾の賊心を滅ぼし、貪瞋痴の三毒心を降伏して恐怖の心を生ぜしめ、懺悔改心せしむるを目的とする祈禱法であつて、金剛童子のやうな佛躰を本尊とします。殊に敵國降伏のやうな國家的祈禱には、昔から大元帥明王のやうな猛烈な偉大な降伏力に充ちた佛躰を本尊といたします。この大元帥明王といふ佛は、大日如來が暴惡の衆生の害心を降伏せんがため、大夜叉明王の形を現じて十方三世の諸佛菩薩及び、一切世界の大勇猛の鬼神四大天王八大龍王百千の天龍天衆、火天阿修羅等の軍衆、大威德の天神地祇等を眷屬として敵軍に應援する惡鬼邪神を悉く懾伏(せつぷく)せしめ敵軍將卒に怖畏の心を起させ、戰意を殂喪して速に軍門に來りて哀を求め、降參せしむるを以て大悲の本誓とする勇猛果敢な佛であります。昔承和天皇の御代に始めて皇室に於て此祕法が修せられ後には國典の恒例として毎年正月鎭護國家の奉爲め此の秘法が奉修せられてをつたのであります。

今日、武運長久の祈りに八八幡詣りをするのは佛敎の八正道に因由するのであり、千社詣りや萬社詣りをするのも、千人針を縫ふのも、皆佛敎の念誦法に由來するのであります。

要するところ佛敎で云ふ祈禱とは惡業の制裁を輕減し、消滅して善果を得んとする業報變換の方法であり、與力と緣欠の理法から主觀客觀の兩面にわたり、身口意三密の妙行を凝してこの世、あの世の現當二世に渉つて功驗を得んとする信仰方法であつて、佛敎の業感、業報等、勢力保存の道理をよく心得て業感緣起說に準じなければ祈禱なるものは、或はたわけたものに墮する邪法となる憂ひもあるのであつて、內容そのものが大慈大悲の至誠の信仰念力そのものでなければならんのであります。

日頃の不誠意や不心得が災難不幸の禍因となるに反し、至誠の眞心や德行が大なる力を現はし、不思議なる結果を誘致することは、あらゆる方面に於て吾等の常に見るところであります。

曾て吾妻山で遭難した或人に就てその話を聽くに、鴛籠山稻荷社のほからの屋根に足を蹈みつけて、その人の云ふことに「神樣だナンテ人が祀つたからこそ神樣と崇めるだけで、人間の方が有り難いんだ」と。その舌の乾はかぬ二、三時間の後には、小瀧の淵から轉落して哀れな最後を遂げ、山を征服せんとして却つて自分が征服されて終つたと云ふ氣の毒な話でありますが、これこそ神罰覿面と申さうか、トモカク日頃の不誠意、不信心、云ひ換へれば唯物的な輕薄な而かも傲慢な反省なき向ふ見ずな油斷が、あの難所に到つて因緣相滿ち忽ち咄嗟に業果を現はしたものと解することは、アナガチ穿つたコヂツケな觀方ではなからうと想ふのであります。靈界の作用は實に神秘微細

であつて氣付かざる裏に人爲行動となつて人事百般に現はれるのでありまして、何事にあれ偶然なんてあるべきものではなく、古來護國の聖典として尊ばれる仁王護國般若波羅密多經の中に、七難の起る原因とこれを滅する敎ひが說かれてありますが、實は因緣の道ほど覿面に恐ろしいものはないのであります。

修驗道の道場たる高山の難所や、危險區域に行者戾しとか、地獄口とか云ふ名稱の行場が定められてありますのは現實に對する危險信號であると共に、反省懺悔の敎誡所なのであります。

信心とか祈禱とか申しますと、善にせよ惡にせよ、その希望を滿たさんために參詣したり拜んだりすることのやうに簡單に考へられるのが常識になつてをりますが、信心と云ふ言葉は本來菩提心を信ずるといふ言葉の略稱で、菩提心とは目覺めたる淸淨心であり、一心至誠の眞心を申すのであつて、この心の發得を念ずるのが祈禱であり、この心を信ずるのが信心なのであります。故に祈禱と信心とは車の車輪の如き因果關係に立つのであります。

(五)

サテたいへん標題から外れて、くどく橫道に入りましたが、涅槃經の獅子吼菩薩品の中に、獅子の震ひ吼ゆるに十一の德が擧げられてありまして、獅子の呻り聲を聞けば水に棲む魚類は深き淵に沈み、陸に住む獸類は穴に藏れ伏し、飛ぶ鳥は落ち、大香象さへも怖れ慄いてしまふと說かれてあります。これは釋尊の譬ひであつて、獅子とは信仰至誠の力ある人を指し、十一の德力は人世社會

に十一の欠陷あることを明し、その欠陷を十一の德目で補ふべきを示したのでありまして、信仰力に滿ちた誠心誠意の無我に徹したる大人物が現はれて、本當に獅子吼したならば忽にして社會は革正され、肅正されるのであります。信仰に活きた滅私奉公の至誠人こそ、眞に社會國家の大難を救ふことが出來るのであります。

× ×

山伏の吹く法螺貝のアウンの音は、この獅子吼に擬するのであり、煩惱の迷ひのねむりを醒して信心の道にいそしめよとの衆生への警告であり、說法であるのであります。

吹き方にも古來からの相承があつて深遠な敎理を象り、三身說法とか說法成辨とか、六度滿行とか、八正道とか、それ〴〵法儀を表はした吹き方が七通り程ありますが、今時は特に僞山伏が横行して何もかもテンデ物になつて居らず、四離滅裂となつて修驗の正しき傳統法儀行法を傳へてをるものは全國でも稀れであります。

由來山伏に一切經山伏といふ綽名があり、雜炊敎だなんて云ふ批評もあつた位、神道、儒道は勿論、道敎にまでも關係を有ち、殊に佛敎はあらゆる部門に跨がつてをりまして、その奥行は一寸想像がつかぬ程であります。

修驗者のことを昔は山伏と云つた外、法印とも唱へたのでありますが、それは佛敎敎理の眞髓たる「諸行は無常なり、諸法は無我なり、涅槃は寂靜なり」を三法印と申すところから由來したものであつて、この三つの眞理を體得し決定印可を得た者、云ひ換へればこの眞理を悟つた故に太鼓

判を捺されて佛法證得の免許皆傳となつた者に對する敬稱で、法印大和尙位といふ稱號が生れたのであります。

十數年前、或る學者が博士論文を起草せんため山伏の研究に沒頭してをるといふ話であつたが、未だ消息のないところを見ると、密敎上の難澁さが思ひやられると共に、その關係內容が廣汎であつて仲々容易な業ではなからうと思ふ程、山伏の敎義は頗る複雜して難解なのであります。

今でこそボツ〳〵斯道の研究者が現はれて、識者や學者の關心を喚起して來たのでありますが、曾て私が大正六、七年に亘り東京に宣揚會を起して主宰し、斯道の復興宣揚を叫んだ頃は敎界の一部に多少の衝動を起し、反響を及ぼした位のものであつたが、今や各本山大に目ざめ法憧を揭げて大衆に呼びかけるに至つてをるのでありまして、山岳宗敎の本場たる奈良縣や京都邊では、敎育界がヤツト認識して一兩年來指導先達を招聘し、靑年幹部の修養登山を試み、感銘を深からしめてをる事實や新傾向を見まして誠に今昔の感に堪へないものがあります。

【四】登山と菩薩道の實踐

專門的にわたることは述者の本意とするところではないので、槪略にわたつて述べたつもりであり、これ以上同じことの繰り返しとなつてはクドクなる感じもいたすことでありますが、山岳道場はツマリ菩薩道實踐の行場であつて、千變萬化の自然の姿を眺め、自然の靈氣にひたり、當體そのまゝ自然界の慈悲のフトコロに抱かれて、そこに法喜禪悅の味を嘗め、上下徒步の間に自づと脚下

照顧の風や純一無雜の高邁な氣象を養はしめ、以て悟道の力を養成し、精進向上の理想を高めしめんとするのであります。活潑々地の氣力を養ひ、自己を顧みて而も眞の自己を發揮せんための練行なのでありまして、これを要するに實踐の綱目といたしましては詮ずるところ六波羅密を以て擧げられてをるのであります。

六波羅密とは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智惠の六ツであります。

第一布施とは施しのことで、これに法施と財施と無畏施の三つがある。法施とは道を說き敎を施して悟りを開かしめ、精神的慰安を與へること。財施とは食を施し金を施し藥を施す等、物質を施すこと。無畏施とは危難に際してゐるものを身を以て救ひ、其人を畏れなからしむることで、ツマリ布施とは博愛慈善の行爲を云ふのであります。

太陽は熱と光りを施し、水は雲となり雨となり泉となつて濕ひを施し、動植物より人間に至るまで互に施し合ひ惠み合つて、この宇宙は成り立つのでありまして何一つとして個々に離れ〳〵に生きてをり活動してをるものはないのです。特に吾々人間は相互布施、相互奉仕の生活で生きてをるのであります。我慾に走り貪り合ふならば互に爭ひが起ります。人を押しのけて自己のみ地位を占めんとし、金儲けにならぬことには手足を出さず、而かも分け前は少しでも多からんことを思ふ：：斯樣な我利々々根性の者があるから、世の中は互に苦しむことになります。この利己心を救はんためには布施の行が大切となるのでありまして、これは佛敎の世界觀から出てをるのであります。

眞の施しは、眞に人を愛する心から他人に安樂を與へんために、他人に慈善の心を起さしめんために、尊い道を行ふために、煩惱の闇を破るために、彼岸の覺りの境地に達せんために行ふものであるのです。恩を返して貰ふために、慳貪者を喜ばすために、果報を得んために、名譽のあこがれのために、三惡道の苦を怖れるために、人より勝れんことを示すために、其他何等かを求めんためにするのでは全然ないのであります。尊い道のためにするのが布施であるのであります。財施のことを喜捨と云ひ聚功德と云はれる所以もこゝにあるのです。

この布施こそは言葉の上にも動作の上にも、心の上にも、お互に美はしい慈悲の心と心がフレ合ふのでありまして、こゝに人間生活の善美と團結とがあるのであります。

第二持戒とは防非止惡の意で身と口と心の三つに於て、不正をしないことであります。身には三ツの過がある、殺生、偸盜、邪婬、口に四ツの過がある、妄語、惡口、綺語、兩舌、心に三ツの過がある、貪慾、瞋恚、愚痴であります。これが十惡業で運、不運、病氣、災難等種々の根本原因となるのであります。これを守れば十善となり福ひの原因となるのであります。

然らば十惡の起源はどこにあるかと申しますと、それは心にある、それは貪慾とて恣まゝにむさぼりて足ることを知らぬ卑劣な心、瞋恚とて怒まゝにむさぼる心に叶はぬときは忽にして怒り腹立つ心、愚痴とて物の是非曲直の辨へなき心、卽ち約めていへば己が氣に入ればむさぼり(貪)、氣に入らねば腹立ち(瞋)、我慢我慾に惱まされて憂喜苦樂に浮沈する(痴)所謂三毒煩惱が十惡の根本であります。吾等凡夫はこの三毒煩惱によつて千萬無量の惡を造るのでありますが、その亦大本はと

いへば、唯一つの我見と云ふ手前勝手の了簡が種子となり、根となつて惡の花を咲かせ、惡の實を結ぶのであります。昔から「指より高き山はなし」といふ諺の如く、富士の山でも目の前に指をつき立てゝ見れば、向ふの山は我指よく低く見える。何事にも我慢我見の自己本位の了簡で物を見ますから、正しく物の眞際を觀ることが出來ないのであります。佛法では一切の善は悉く無我より起る。一切の惡は悉く我見より起ると說きます。故に一切の善事善行をなすには、先づ無我の道理を知ることが一番肝心であります。この無我といふことに就ては人無我、法無我といふことがあつてこゝでは容易に說き盡くされぬから一番手近い吾身の生れたことから考へて見ますならば、この五尺の身體は全く父母のもので我物では聊かもないのであります、前に引例しました如く一茶の句「何不足、人ははだかで生れたに」とありますが、はだかそのものが自分の所有でないといふ道理を先づ諦めて一毫も我見を起さぬが無我の眞理に入るの階梯であります。父母にもその父母があるから次第に遠く遡れば終に國祖伊弉諾、伊弉丹の二神に歸して仕ふのでありまして、我國民たるもの常に報本反始の誠を存して一日も國祖皇祖の御鴻恩を忘れてはならぬことに氣が付くのであります。無我の道理に徹してこそ始めて眞底から報恩感謝の誠意が生じますので「あり難い」「勿体ない」といふ考が起るのであります。

大智度論に「恩を知るは大悲の本なり、善業を開くの門なり」とありまして、佛敎の世界觀から見ますれば今日自分の存在は一切因緣によつて成り立つのであつて、先づ第一に父母養育の恩、次には師長指導の恩、國王保護の恩、衆生互惠の恩、三寶冥助の恩によるとし、大別して四恩として

說かれてあります。こゝで詳細は論じませんが、これは人間の家庭的、國家的、社會的、宇宙的の四ツの恩に奉仕することで、人皆この觀念の上から出來てゆくならば、立派な家庭、立派な國家、立派な世界が成り立つのであります。こゝで特に留意を要することは、報恩といふことが善惡是非を擇ばず痴煩惱に墮してはならぬことであります。出家得度の作法に「三界の中に流轉すれば恩愛斷つこと能はず、恩を棄てゝ無爲に入るはこれ眞實に恩を報ずる者なり」とありまして、これは阿含の淸信士度人經にある言葉ですが、誠に意味深長な有り難い言葉で、三界の導師たるべきものゝ大に心得ねばならぬことで、報恩といふことが眞に徹底しませんと痴けたものとなつて、却つて惡業の因緣となるのであります。ほんとうの報恩行云ひ換へれば正しき人道の實踐者たらんものは、どうしても貪瞋痴の三毒煩惱を離れて、無我の眞理に順ぜねばならぬ。無我の眞理に順ぜんがためには、宇宙の原則たる三世因果、善惡應報の自然の制裁を諦めなければなりません。從つて因果應報の道理を信ずれば自づと十善を奉行せねばならぬことになるのであります。楠公の如き、廣瀨中佐の如き幾多愛國の武士や憂國の志士が從容として國に殉じ、義に斃れましたのも畢竟無我の大道に徹してをつたがためであります。

先年上海事變に肉彈となつて斃れた三勇士を散華と散つたといふ風に、當時新聞紙上で讚へましたが、如何にもその通りでありまして、佛敎では大法要には散華と申しまして五色の蓮のはなびらを散じながら、佛の功德を讚歎するのでありますが、三勇士の最期こそは功德そのものであり、布施そのものであつて、散華と絕讚したことは誠にふさはしい讚詞であると存じます。山伏の山修行

では自分の履く草鞋を八葉の蓮華と心得るのでありますが、そこに有り難い觀念が伴ふのであります。十善の功德や果報に就ても序に述べたいのでありますが、あまり長くなりますのでこの邊で切り上げることにいたします。

要するに天地萬物一として秩序規律のないものはないのでありまして、吾等人間も守るべきを守つて自他を害する身、口、意の三業動作を慎まねば、終には國家を害し人類を害することになるのであります。國家の安寧秩序も人類の福祉平和も根本に遡れば、全く十善に基くことゝなるのであります。傳敎大師が天皇樣に上つた山家學生式の初頭に「國寶とは何物ぞ、寶とは道心なり、道心ある人を名けて國寶となす」とありますが、謂ふところの道とは大乘菩薩道の根本たる十善戒のことを申すのであります。

第三、忍辱とは辱かしめを忍ぶこと「ならぬ堪忍するが堪忍」で、よく堪へ忍ぶことであります。他人の利益にならぬことは忍んでせぬ、自ら侮辱を受けても堪へ忍んでイカリを發しない。自ら驕慢を起さず寒熱風雨飢渴にもよく堪へ忍ぶことで、修驗の山登りは忍苦行としてはまことに適當なものであります。因緣の二字さへ心に刻みつけて置けば、社會生活に於ては容易に耐へ忍ぶことは出來るのであります。

第四、精進とは精出して進むこと、勉勵努力することで、如何に忍辱はありましても精進がなければ向上進歩はないのでありまして、障害に遭遇すればするほど努力して行く——つまり因緣を開拓して行くことであります。

第五、禪定とは靜思のこと、靜慮のことで心を散亂せしめぬことを云ふのであります。解脫の果はこゝから生れ出づるのであります。

第六、智慧とは皮相的な見解を去り眞實の姿、眞實の心を見ることでありまして、因緣因果の諦觀を云ふのであります。

以上の六つを佛敎では迷ひの此岸から覺りの彼岸に到る船に譬ひ、車にたとへてをるのであります。ですから上求菩提、下化衆生の菩薩道實踐には是非なくてはならぬ乘物であるのです。卽ち布施の心は慳貪を止め、持戒の心は勝手氣儘や不節制をくぢき、忍辱の心は怒りや自暴を離れ、精進は懈怠を除き、禪定は放心を離れ智慧は愚痴邪見を離れるのでありまして、この禪定と智慧も忍辱と精進との關係と同樣、車の兩輪の如く心散亂せず靜慮によつて智慧明かに、智慧明かにして心散亂せずで天台ではこの兩者を止觀と云ひ明靜と申します。止とは放慢な心を止めて一所に落ちつけることであり、觀とはよく眞相を見ることで、明は智慧の光明輝き、靜は心落付いてゐることを申すのであります。

【五】 三道一貫と修驗道

日本佛敎の開山と崇めらるゝ聖德太子が神、儒、佛の三道を以て治國の大本、國本涵養の要道となし玉ひしことは太子の憲法其他の御文章によつて明かであるが、太子の滅後十四年に生れた役小角によつて此の精神は繼承せられ、山岳を以て道場となし修驗道なる法門が開かれたのであります

が、吾等大和民族の思想信念を培養するの道としては、寔に以て國家相應の法門であり、殊に人心の頽廢、思想の混亂、見解の相違、對立相剋等甚だしき現代に對する燈火であり、羅針であると信ずるものであります。

近來切りに唱道せられたところの日本精神なるものは遠く建國の始めに於て神武天皇が詔り玉ひし「皇孫正しきを養ふ心を弘む」と仰せられた「心」を本として擴充せられる精神を指すものと信じますが、本來正しき心を養はるゝ宗家皇室を中心としまして、三種の神器によつて表徴せられます智、仁、勇の三德を基として建てられたる精神的國家が我大日本國であつて、天地の道理によつて樹てられたる眞理の國、所謂神國たる所以であると信ずるのであるが、其の後儒敎の說を攝取し佛敎の思想を融會して包容消化し血となし、肉となして國民精神を豐富にし、以て皇謨を翼贊し國家を莊嚴して來たのであることは申すまでもなく、實にこの神儒佛の三道は知らず識らずの間に醇化せられ、所謂大和魂となつて活現してをるのであつて、吾國民精神は建國の精神を幹として枝葉華果をつけて見事に生長繁茂した大木の如きものとなつてをるのであります。それ故、日本精神なるものを把握し、これを强調し、而かもこれを中外に宣明せんとせば先づ第一に建國の大精神に目覺むると共にこの三道に對して認識を深め、敎養これ努めねばならぬと思はるゝのであつて、この敎養あつてこそ國體觀念自づと明徵たり得るものありと信じますのでありまして、日本精神なる言葉に眩惑して偏へに外來思想の排斥なりと狩違ひしたならば、それこそ見當違ひの甚だしきものと云はねばなりません。

この三道一致の精神運動は獨り上代に於てのみならず、近代になつても各方面に力說せられ、殊に德川中期には石田梅巖ありて三道歸一の實踐道德「心學」の提唱あり、明治中葉には神官川合清丸あり、大道社を設立して三道並行の運動を起し、亦傑僧雲照律師あり、三道一貫を力說せられてをるのであつて、何れも憂國至誠の熱血を傾倒せられてをるのであります。

然るに明治維新以來、西洋文明が入つてからは歐米心醉の風潮滔々として、その渦卷きに卷きこまれ、イデオロギーやイズムを歐米思想にとつたがために、國民精神の歸趨を失ひ、やゝもすれば本末顚倒して邪道に陷へり、兎角新しいもののみを追求して過去を顧みない傾向が著しく、本來の國民的信念が痛く攪亂せられ、右傾し、或は左傾して殆んど中正を得ない憾みが甚だしかつたのであります。これ皆、歐米依存の敎育より來れる弊害を暴露したものであります。

吸々の辯を費すまでもなく、祖先を懷ふ心は即ち神を敬ふ心となり、神を敬ふ心は同時に國を愛する心となるのでありまして、忠君愛國の精神を發揮する源は實に敬神思想に基くのであります。

然し乍ら、五常の道德觀念を養成せざれば、社會の制度を整ひ秩序を匡して天下を經綸することは能はず、而かも亦、迷ひを轉じて悟りを得なければ、國家人類の向上發展は期し難いのであります。

こゝに於てか、神、儒、佛の三道は吾等日本國民の精神的糧として大に識得の必要を認むるのであります。元より「六合を該ね、八紘を掩ふ」は建國以來の大精神でありますから、あらゆる思想を檢討し咀嚼し醇化せんとする態度は、常に有たねばならぬことは申すまでもありませんが、我國體の精華を發揮し、仁義道德を實行し、精神を作興し思想を善導し、以て人生の意義を徹底せんと

する上から申しますならば三千年來の既往の歴史に徴しまして、教養の根本的精神資糧を此の三道に求めねばならんものと信じますのであります。況んや皇國日本の眞使命を自覺し、大和(だいわ)の精神をフリ翳レて皇道を四海に宣布し、人類平和の大理想實現に躍進せんとならば、先づ以てこの三道の眞髄を體得躬行せねばならんものと私は信じます。

最近、日本精神の再檢討が行はれ、殊に神道、佛道に對する再認識運動が擡頭してをりますが、然しそれらの精神運動が若し一方に偏したるものであつたり、何等かに囚はれたものであつたり、或は單なる分析であり解剖たるに過ぎないものであつたならば、それは甚だ心細いものでありまして、一時の感情に驅られた固陋淺薄なものであつてもならぬと共に、畏くも教育勅語に宣らせ玉ひし如く、古今に通じて謬らず中外に施して悖らざるものでなければならんものと存じます。そして亦、それが單なる感情であり、宣傳であり、研究であるに止らず、それが個我の覺醒となり、信念となり、實行となつて始めて意義あるものとなるのであります。

思索や觀念や宣傳丈けに止まらず、信念となり實行となつて現はれるためには、どうしても、實踐躬行、體驗的教化修錬に俟たねばならんのであります。こゝに於て訓錬や儀式や宗教的行事が重要な役目を演ずることになるのでありまして、既成宗教の何れもが戒行を定め、法則や行事を設けて修行せしむるは當然な成り行きであるのであります。だが然し、因襲や形式にのみ捉はれて儀式を翫び、肝心な心髄を失ひ拔け殼同然なものとなつたならば、本來の意義を大半失つたものとなることは勿論であります。そして亦それらの儀式なり行事なりが、あまりに特殊的なものであつたりあまりに堅苦しいものであつたならば、時運にも添はず民衆の興味をも削ぎ、時代からは可なり緣遠いものとなつて終ふ憂ひもあるのであります。

これら諸點から觀察します時に、宗教としての超宗派的三道一貫に基く眞俗不二の教風たる民衆的山岳宗教修驗道の如き體驗主義の修養が、今や時代相應なものとして新しき意義と興味とを以て將來を示唆してをることを私は信じますものであります。

實は、明治維新の廢佛棄釋の動亂と物質萬能の風潮より來れる教育方針に禍されて以來、佛徒は意氣銷沈して本來の面目を發揮し得ず、法城の奥深く蟄伏した形となつて居り、あまり型に捉はれ過ぎて動きのとれぬものとなつて、餘弊を釀してをるのでありますが、近來國家社會の情勢につれ覺醒のけはひの見ゆることは喜ばしいことであります。

とりわけ明治初年まで宮樣を法頭に戴き、在家宗教として、教勢天下を風靡してをつた修驗道は神佛習合廢止のとばちりを喰つて爆彈的打擊を受げ、教團の解體作用を起し、認識不足も手傳つて衰退其極に達して終つたのであります。抑も神佛習合とか混淆とか云つた明治初年の廢佛毀釋の騒ぎは一面に於て理由はあつたが、半面に於ては無分別なる排他思想に驅られ、それが破壞行爲となつて現はれ、理非曲直の見分けなく一部の役人によつて强壓手段を講ぜられた點も少くはなかつたのであるが、その結末を見ると、單なる外面的形式に陷つて徹底したる本體論に根據したる革正とはならなかつた憾みが甚だしかつたのであり、今日行詰りを來してをるやうな不見識な、無理や落度や矛盾も大にあるのであります。抑も名分を正すといふことは大切であるが、名稱にこだはると

いふことは意味なきことであつて、元より神社と佛閣の區別は當然であるが、本地垂迹の如き佛說は排擊を受けるやうな曲說ではなく、正しく天地の眞理であつて、祖宗の神々の御威光を益々發揚するには適當なる敎理解釋であると思ふのであるが、當時それさへも諒解せられず、而かもその反面に於ては名目を改稱踏晦して舊來の宗敎行爲をそのまゝ神社に轉用するやうな、無分別な無茶な事實も數々あつたのであります。それが神社宗敎非宗敎問題を離れ、眞に國家將來のために利益となれば誠に結構であるが、却つて神社の威嚴を損じ、或は異論を生じて行詰まりを來すやうな破目となつたのでは、大に考究研討を新にせねばならぬと共に刷新の要も多々あらうと存じます。

そはともあれ、認識のあるなしに關らず、意識するとしないとに係らず國民の大衆は一千數百年以來、昔も今も一樣に屋內に神棚を祀り、佛壇を飾つて神佛の區別を樹て神の氏子であり、佛の信者たることを標示してをるのであつて、そこに精神的何等の矛盾も撞着も感じないのであります。神に向つた時の氣持と、佛に向つた時の氣持と有り難いと云ふ氣持に於て、そこに別段の變りも異論もないのであります。而かも神を敬ひ佛を念じ、仁義五常の良心を有ちながら自ら神、儒、佛三道一貫の國民であることを大抵の人々は氣付かずにゐるのではなからうか。好むと好まざるとに關らず、任ずると任ぜざるとに係らず、此事實に直面する時、法門の立場に立つて云ふならば、春秋の筆法を以て云はずとも紛ふべくもない修驗道の信條そのものであり、寧ろ信奉者であり、支持者であると私は申したいのであります。勿論神棚を祀り佛壇を飾るに至つたことは、其都度皇室の諭告によることではあるが、修驗道なる法門が如何に敬神崇佛の御趣意を國民一体に普及し、三道一

貫の道理を民衆に徹せしめたか、その功績には實に偉大なるものがあるのであります。

敬神崇佛の精神が薄らぎ、宗敎殊に佛敎に對する認識を欠いた今日、神佛に對する觀念が不得要領となり神といふ字佛といふ字に捉はれて、神社と佛閣は恰かも相剋的存在でもあるかの如き觀念を助長せしめ、これ迄の民間行事や舊來の習慣が崩れて以來、對立的の眼を以て神佛を觀る樣な傾向になつた結果、過去の良風美俗が何等檢討せられず、陋習打破の犧牲となつて弊履の如く捨てゝ顧みられず、何もかも忘れ勝ちとなつて終つたのであるが、或時代より明治維新までは神佛信仰に關する國民大衆のあらゆる民間行事の殆んど大部分は修驗道の信條に基き、その指導によつてなされてゐたことは明白な事實であります。敎界の第一線に立ち、民衆的宗敎行爲にかくも手廣く關係した法門は修驗道以外にはないのであります。日本六十餘州津々浦々、どんな邊僻な村里に行つても、山伏のゐないところは殆んどなかつた事實が雄辯にその間の事情を物語つてをるのであります。これ畢竟、修驗道なる法門そのものが國民信敎の事際に卽したる敬神崇佛と、五常道德の三道一貫に據つてをつたがために外ならぬのであります。ところがツイ昨今迄は信仰の道理なり、敎ひなりに達してゐる適當な指導者が、中央にも地方にも澤山ゐなくなつて終つた。居て見たところが用がなくなつて終つた。社會一般が誤謬や迷信や偏屈に陷へるは自然な成り行きなのであります。

私はヨク人に聞かれるのである、法印とは神主か坊主かと。私は答へる、神職にも非ず、佛職にも非ず、神を敬ひ佛を念じ五常の道を旨とする國民の先達であると。

國民宗の修驗道は濫觴當初より今日に至るも敢て變らず、國家本位に據る敬神崇佛の民衆的法門

であり、而かも一宗一派の教義に捉はれて別安心を説くに非ずして、皇室を中心とする日本人の總安心を標目とし、民族精神の向上を期せんとする超宗派的綜合一括の現實的大乘の法門であり、修養道であるのであります。

世間には日蓮宗だ、一向宗だとお互に宗派に執着し、その優劣を論じ、或は排斥し合つてをる人があるかと思ふと、神道だ佛道だと、一方に拘泥して相剋摩擦を起し、個我に捉はれて對立の弊風を釀しつゝある人々のあることは、宗教本來の使命に反するは勿論、神佛の趣意にも悖り遺憾至極の至りであつて、吾等の領得に苦しむところであります。吾等國民お互は敬神尊皇の大義を經とし崇佛和合の精神を緯として現下の時弊を匡救し、以てこの非常時を克服することこそ刻下の急務であらうと信じます。不明瞭なもの、解らぬものをホトクのが佛であり教ひであつて、佛の戸籍は印度にもなければ支那にもなく、實に皆銘々の心の中にあるのであります。德川中期より明治に至り更に最近に至るまでの一般思想界を瞥見するに、佛教に對し如何に妄評謬説が多かつたか、實に噴飯に價するものがあるのであります。

いやしくも日本人にして祖宗の神々や、國家功勞の神々に對して敬意と感謝を捧げざる者一人としてあらうべき筈はなく、それと共に佛教が一千三百年來、國民精神と如何なる關係交渉を辿つて來たか、國家的觀念なり意識なりが佛教に因つて如何に强められ深められて來たか、そして日本精神がこれに因つてどれ程伸張されて來たか、佛教が日本文化發達に如何に支援し貢献して來たか、敬神崇祖と何等矛盾することなく、何等排擊することなく、如何に融合し握手して皇運を扶翼し奉

つて來たかを考へる時に、自分の認識不足から來た見解相異を棚に上げて、獨りよがりの愛國主義をフリ廻し殊更に排他の言辭を弄して人騷がせをするが如きは、却つて建國の精神に戻り本体不動なる國體の淵源を不明徴たらしめ、應化自在なる國家の前途を謬らしめ、而かも忠君愛國の精神を痲痺せしむるの結果を招來するの憂ひありはせぬかと存じます。

さき頃、本地垂迹説が國體觀念上不敬の言説であるとて上申書を提出したものあるやの由聞いてをりますが、認識不足な獨斷もこゝに至つて極まれりと申さねばなりません。過去の歴史を繙き佛教の教理を辨へたならば、斯樣な無分別には陷らぬ筈であつて、若し此の説が不敬であり神威冒瀆であるとしたならば、聖德太子を始め役行者、傳教、弘法其他先德聖人の説を抹殺しなければならぬと共に、佛教そのものを全廢しなければならぬことにならうと存じます。

本地垂迹の思想は便宜的な思想でも、政策的な思想でもなく、佛教本來の思想でありまして、宇宙の靈德を本地と云ひ、その本地卽ち本体から現はれた人格者、卽ち神と稱し佛と崇めらるゝ方々をその垂迹相、卽ち現象又は權現と見る思想であつて、宇宙の本体を體と用との關係に於て見る思想であります。

宇宙の本體は久遠の昔から無限の未來まで、常住不變の實在であつて、この實在を佛教では久遠の本佛と稱し、或は法身とも唱ひ、又は大日如來とも申すのでありまして、印度の釋迦の如きもこの本佛の迹相であつて、日本の神々もこの宇宙の本体たる靈德から增上果の勝緣地たる日本國土に出現ましましたる靈格的顯現であると觀るのであります。

卽ち神の宗教的觀念に宇宙的根據を具へて威光を增すべく、尊崇の意味から出た解釋でこそあれ決して冒瀆どころの沙汰ではないのであります。出現の因緣地たる國土が異なる故に神と稱し佛と唱ふるも、本体は同一であると觀るのが本地垂迹の思想であるのであります。唯こゝで最も注意すべきは、日本國土そのものが他に比類のない世界無比の勝れたる因緣地であり、從つて日本國土に降臨顯現まし〳〵たる神々は、世界無比の差別相を有つ靈格者であると申上げることが出來るのであります。聖德太子の本迹神道、傳敎大師の一實神道、弘法大師の兩部神道等、何れも本地垂迹說であつて、國家にとつては一千三百年來の試驗濟みの說なのであります。

この說に就ての詳細並に神社對宗敎問題等にも多少論及いたしたいのでありますが、それらに關しては別の機會に讓らねばなりません。

【六】 靈場としての吾妻山と、これが開發に就て

關東地方の名山殊に富士山、八菅山、三峯山、日光山等の諸山は役行者が日本武尊御東征の神蹤を慕つて修行以來、拓けたといふ說であるが、東北の名山卽ち出羽の三山、鳥海山、藏王山、飯豐山、吾妻山等は白鳳年間行者が勅を奉じて踏開したことが記錄に見えてをります。

家形山と東吾妻と中吾妻の中間盆地たる谷地平は、行者草創に係る白鳳寺の遺跡であると傳へられ中吾妻山中の阿伽澤は行者發見の靈地として、吾妻權現又は奧之院と唱ひ、吾妻山信仰の中心をなしてをります。このあたり八丁四方は密嚴華藏の中台大日如來の天然靈地として崇められ、自然そのまゝの姿を保持して、古來決して人工作業を加へてはならぬといふ固い傳統的掟になつて信仰をつないでをるのであります。通稱奧詣りとして有名な參詣所湯殿山の靈場御寶前を神社と改稱しながら、今以て社殿を設けず何等人工をも加へず、剩へ古來よりの修驗道の信仰的秘趣や、傳統や行事を破れぬところに此靈地と同樣、山岳宗敎としての修驗道の敎理信條が千鈞の重きをなしてをるのであります。

一切經山は名の如く一切經を埋めた願經埋納の山であると傳へられては居るが、微すべき史實は殘つて居らぬやうであります。

吾妻山脈中には七十餘の瀧ありと稱せられてをるが、その中には不動尊や、觀世音勸請の瀧が隨所に見られ、亦各地の岩洞靈崛には諸佛諸神諸菩薩の影向靈所が指示せられ、所謂曼荼羅の諸尊が全山に展開象徵されてをるのであつて、此山に入る者は莊嚴道場を踏みながら其身其儘淨化せられて、諸佛諸神と同體たることを證する現身得果の秘趣が仕組まれてあるのでありまして、全山悉く一乘菩提の淨土として、將た又密嚴華藏の聖壇として崇められた修行道場なのであります。各方面の登山口に姥神が祀られてあるのは、淨土の入口を表示したのであります。各方面に於ける登山口に曾て其昔宿坊や茶屋類の可なりあつた事實に照しましても、往時吾妻修行や參詣の盛んであつたことが點頭かれるのであります。

山中の秘境とも云ふべきは大倉川と中津川の流域であつて、中津川には十有六七の飛瀑連なり、六十丈の高さを有つ瀧もあつて豪壯な大溪谷であります。大倉川の溪谷にも大瀧小瀧の二瀑布あり

斷崖絶壁相連なり重なり合ひ、殊に天狗の鼻と稱するあたりは覗きの行場であつて、鬼氣人を壓する想あらしめ怖畏の念を生ぜしめます。

吾妻山は古來から本縣下に於ける唯一の修驗道の國峯道場と定められ、現在に於ても兼行として正統修驗道を傳ふる天臺寺門に於ては、修驗道法階檢證の修行地と宗制上規定せられてをるのでありますが、三關三渡の趣意や古くから行はれた入峯の諸行が滅亡に歸したのみならず、斯道の奥義は元より秘所や行場の相傳者が殆んど皆無となつたので遺憾に堪へず、及ばず乍ら私は昭和三年以來實地調査を思ひたちまして、毎夏修行を兼ね研究を續けてをる次第であります。

道場としての吾妻山が出羽の湯殿山と同樣な由緒地でありながら、湯殿山のやうに榮えずに衰微して終つたにはイロ〳〵原因や理由もあるやうだが、口碑では八幡太郎義家が東征の砌、阿部宗任、貞任が此山にたて籠つて抵抗したがために、爾來官命を以て山を封じ、參詣登山を禁じたので山中の伽藍やアチコチにあつた宿坊籠所なども燒却後再興しなかつたのだと云ひ傳へられ、宗任大敗の當時天變あり、七月土用の眞夏に山中一面紫の雪が降つたと今も語り傳へられてをります。

事實の如何はともあれ、登山口としては會津耶麻郡方面が早くから拓け、役行者や弘法大師が此方面から登つた由緒から表口と稱せられ、秋元湖畔の千貫口は猪苗代方面の登山口、沼尻達澤口は田村安達郡方面（現在は川桁驛より木地小屋まで電鐵の便あり）からの登山口、これらが議場で合して奥之院に到るのであるが、この外小野川湖畔よりの口と、奥羽本線峠驛より滑川溫泉を經て來る口及び、米澤方面より大平を經て吾妻溫泉方面に差しかゝつて來る登山口は、ヤケノママに於

て合して奥之院に到り、又木地小屋方面から駕籠山稻荷祠に登つて谷地平に出で、奥之院に到るの參詣口もある。これら登山口には一の木戸、二の木戸と行場があつて、水垢離をとつて潔齋の前行をした遺蹟が至るところに見られます。

吾妻權現は福島、山形兩縣民の信仰をつなぎ、殊に鶴ヶ城、亀ヶ城の鬼門除けとして古くから會津武士の信仰あり、殊に地元の修驗者等が一團となつて藩士の領内や鄕土のために霖雨には晴天、旱魃には降雨を祈つた史實は數限りなく、吾妻權現は鎭護國家五穀成就の神として一般から崇信せられてをつたのであります。

信夫郡方面では土湯口が最も早く拓け、曾て修驗六坊があつて宿坊であつたこと及び東國に國分寺造營の砌、秦野川勝が奉持して來たと傳ふる聖德太子の尊像を祀つた堂宇が今以て現存してをつて、由緒の地たることを物語つてをります。高湯口も三百年前に開け、先達山には地藏尊の石佛、麓の登山口には姥神堂が祀られ今も現存してをります。

元來修驗の道場であつて、古來から有名であつた諸國の山々は吾妻は無論のこと、何處も一樣に斯道の中心道場たる大和の大峯山、河内、山城の葛城山の二つの本場道場の秘趣を移植したものであります。吉野山から熊野山までの所謂大峯山脈七十里の間は、兩部曼荼羅に象つた密敎の道場であり、大阪灣の友ヶ島から山城の金剛山に至る葛城山脈は役行者が法華二十八品を埋納した由緒ある顯敎の道場であります。そして此二つの顯密中心道場が實に何人も感銘する建武中興の一大聖地であり、勤皇思想の發祥地なのでありまして、南北朝時代、吉野や熊野には修驗大衆が坊を連ねて

をつたことも有名なのであります。

「歌書よりも軍書に哀し吉野山」南朝五十七年、櫛風沐雨の悲史をとゞめた彼の吉野山、而かも眇たる彼の吉野山が、天下の大半を相手として皇運を持續せられた裏面には吉野山、熊野山の修驗山伏が楠、新田、北畠等の忠臣傑士と策應してお味方申上げ、地方の修驗末徒亦全國的に躍つたことは史實の證明するところでありまして、當時伊達の靈山の如きも亦これに非常な關係を有つてをるやうであつて、奥羽の山伏衆が裏面に活躍したことは事實と見られます。モト／＼修驗の法門たるや皇室中心主義を以て一貫してをり、質實剛健の敎風を以て不言實行を信條としてをつたのでありますから、尙武の精神にも富み修驗者からは彼の有名な備前兒島の尊瀧院の高德のやうな尊皇家も飛び出すと云つた具合で、或は密使となり密偵となり、或は武器をとりて戰ふなど當時恐らく十數萬を突破したであらう全國修驗者に勤王の精神が漲り、全國忠臣の策應活動を助けたものと想像せられますと共に、當時本山修驗の法頭たる聖護院宮は後醍醐天皇の御猶子尊珍法親王（元弘役のため越前に流され、江戸附近に於て御入寂と稱せられてをるが、伊達郡の某所に御埋め申されたなどいふ流說もある位で、トモカク配所にて御示寂）並に皇子尊法親王、聖助法親王のお三方が相次いで門跡を繼承せられ、全國の山伏を統御あらせられた事實に顧るも、當然な成り行きであつたと思はれます。

當時、高野山の山徒が尊氏の武威に恐れ、後醍醐天皇の勅に應じなかつた時に、吉野山の修驗僧徒が奮然天皇に味方しまゐらせたところに、修驗の信條と意氣が見られるのであります。

八幡太郎が宗任貞任を征討するに當り、修驗山伏と深い關係のあつたことも史實によつて明かであるのであります。元來平家が比叡山延曆寺と深い關係あつた如く、源氏は大津の三井寺、卽ち園城寺と密接な關係を有つてをつたのであります。源頼義がその子、八幡太郎義家、加茂次郎義綱、新羅三部義光の三子を三井寺の三社の前で元服させたことは有名な話であり、史家の說では當時三井寺の修驗僧行觀とは特殊の關係があつたやうでありますが、他日頼義、義家が前九年役、後三年役に於て關八州東北一帶に居た三井寺や聖護院の末徒たる修驗僧の助力を得て地理的狀況を知り、鎭定に與つて力あつたことは史家の一致する說であります。

ところで修驗の國峯道場たる吾妻山が、何故に宗任、貞任を圍つて之に味方をしたのであるか、いろ／＼疑問が起るのでありますが、トモカク參詣登山を封じられたといふ事實によつて想像すれば、吾妻山を中心とする山伏や地元の一般民衆は賊軍に味方したものとしか思はれぬ。かく想像しまして當時の山伏の系統に就て調べますに、當時本縣下に散在した修驗者は羽黑修驗と同樣、大部分は眞言宗系統の所謂當山修驗ではなかつたか、そしてそれらの山伏等は鄕土の豪族安部宗任一派の威勢に靡いてをつたので、官軍の不利を計つたからこそ肝心な道場が閉鎖を喰つたのではないかといふ點に思ひ當るのであります。本縣下に於ける當時の修驗者の法系に就て以上の如く斷定を下す充分な證據はないが、當時地方的に威勢のあつた羽黑山伏が眞言系であり（尤も德川時代になつて有名な天宥上人が羽黑に出で天海僧正を師と仰ぎ、東叡山一品親王を法頭に戴き、羽黑一山天台に改宗した）殊には弘法大師の遍歷などより推す時は、天台系統の本山修驗は當時澤山居なかつた

のではないか。三百五六十年前の記錄を見ると、本山修驗卽ち三井寺聖護院系統の修驗が本縣內に大部分を占め可なり居ねばならぬ筈の當山修驗たる眞言宗醍醐寺三寶院系統の山伏が、その反對にホンの僅かであつたところを見ると、聖護院宮の威光に服して本山修驗に轉身したのではないかと想像いたすのであります。現在相馬郡方面に多少昔の眞言系統の山伏が殘存し、羽黑山伏の古い秘法類を傳へてをる外、天台系統の山伏であつて而かも宗任、貞任に關係を有つた家柄の山伏も現在縣內に殘存してをり、それらが眞言、天台兩方面の次第や法則類を傳へてをる點、其他によつて推察すると、八幡太郎東征以來懲戒を喰つた眞言系統の山伏が姿を消して轉身轉派したる天台系統の者が澤山出現したかのやうに考へられるのであります。本縣內の山伏等が傳へし秘法次第類の法流や、傳燈奧書き其他に就て取り調べまして、本縣內山伏の動向、系統等は大略想像せられるのであります。勿論天台系の山伏でも日本的に有名であつた會津の南岳院、信夫の良藏院、伊達の大正院などを頭とする配下には可なり古い家柄の山伏も居つたのでありますから、必ずしも右の如く一概に推測を下すわけにも參らん點も多々あるにはあるのであります。如上法系に關する推測想像はともあれ、吾妻山を中心として居つた山伏等が阿部氏を支持してをつた點丈けは事實と見られるのでありますが、徵すべき確證なき限り疑問として後日の考證に讓る外ありません。

戰國時代になつてから足利氏と聖護院道興の關係、武田信玄や上杉謙信と聖護院と、その末徒たる山伏との關係、或は中國方面に於ける毛利氏と尼子氏や大友氏との抗爭に、聖護院が奔走斡旋して講和を結ばしめた事實、殊に近衛家の出である聖護院道增大僧正が京都から遙々奧州に下向せら

れ伊達植宗、晴宗の父子爭ひを和合せしめられてをる事實等武家と山伏とは裏面に於て非常な關係を有つてをつたのでありまして、殊に本山修驗の頭領であり、兼ねては三井寺の長吏(ちやうり)(管長)であつた聖護院宮は、時々諸國を巡遊して諸大名と關係を結び交遊してをる史實も明かであり、隨つて傳統法系を重んじたその部下たる諸國の山伏と武士とは關係深く、源平時代や南北朝時代には殊の外連絡が密接であり、特に南朝の裏面に於ける山伏の活動などはよく窺はれるのであります。

これらは修驗道が彼岸の敎といはんよりは、現世的な卽身成佛主義の色彩から來た現れであつて皇室を中心とする國家鎭護、國民豐樂を眼目とした敎風に據るのであります。ですから明治維新前までの修驗道の年中行事たる大峯(おほみね)修行を見るに聖護院主は　天皇陛下の御撫物(御衣)、院家(かんけ)衆(聖護院門跡の御隱居寺)は將軍家の撫物を奉持し、諸國の大先達衆はそれ〴〵諸大名の祈念を一般山伏は村中安全の祈念を承り、殊に門跡宮大入峯(にふぶ)の砌などは五萬十萬の山伏衆が、御供をして京都から軍隊的大行軍をつゞけ、大峯(おほみね)入りをして一夏九十日風雨に曝されながら難行を續け、ところ〴〵の行場で、寶祚無窮、天下泰平の採燈大護摩供祈禱を奉修して歸還し、苦行その儘の姿にて宮中に參內し　陛下に直面いたして御撫物を奉還いたすのが連綿慣例となつてをつたのであります。下々の山伏衆は仲々御門跡宮の御姿を拜し得なかつた程、京都市中は山伏衆で埋まり、雲か霞のかなたに列して御供をしたといふところから霞修驗といふ名稱さへもあつた程で、入峯修行の盛觀は京都の花と稱せられた程豪盛なものであつたさうであります。

斯樣な次第でありますから幾多の史實から想像するも、吾妻連峯や伊達の靈山を中心とする本縣

下には、秘められたる鄕土史實がマダ〳〵湮沒してをることが想像せられるのであります。

記事餘談に渡りましたが、由來斯道の皇室中心主義の精神が偶々戰國時代、殊に南北朝時代に遭遇して油然として活現したものであることをかへりみますと共に、山岳道場は單なる迷信者流の參詣所や、物見遊山氣分者の公園地ではなくて大和魂修錬の國民道場であつたのであるから、將來は尙一層かくあるべきであるやう開發すべきものでありたいと云ふことを、特に私は强調いたしたいのであります。

明治維新前まで一般民衆の登山は修驗道の敎理に基く國民精神の昂揚と、陶冶鍛錬が主眼であつて、苟くも男子十五、六歲の元服期に入れば必ず靈山高岳に登つて、權現詣りをせねばならぬ慣習となつてをつたのでありまして日本六十餘州何處を調べても、此の習はしのないところがない程、修驗道の敎義が一般民衆に徹してをつたのであります。お山駈けをしないものは靑年の仲間入りが出來ないといふ固い掟のあつた地方が大部分であつた。それは天地神明に對し、成年になつた感謝報告のためのお山駈けであつて、日本男兒として神々の照覽を仰ぐと共に大に元氣を伸張して將來を誓はんための修行であつたから、それは成年者の義務であると心得てをつたのであります。

くはしく云へば昔のお山駈けは天地神明は勿論、先祖代々に對する報恩感謝の報告修行であり、供養修行であり、轉迷開悟の解脫行であり、懺悔滅罪の淨化行であり、君民一體、滅私奉公の菩提行であり、而して忍苦精進の意氣を培ひ乍ら不動の精神を鍛錬しつゝ信念堅持の實地體驗修行であつたのであります。かくの如く過去の日本男兒は登山行を繰り返すことによつて、冥々の裏に

國民的意氣と信念を養つてをつたのであります。

今日西歐文化の自由思想に毒せられた人々の登山の題目を見れば浩然の氣を養ふとか、靈氣を滿喫するとかまではまだ良いとして、その中味が空虛であり、意識も不足であり、甚だしきに至つては山を征服するナンテいふ無道な非人道的觀念をモットーとして、それに氣付かず自ら文化人なりと自負してをる程左樣に西洋カブレの山登りが流行して、日本精神の眞髓を忘却してをるのであります。勿論國民精神の修養訓錬の機關は他にいくらもある今日、山を古來の傳統的宗敎觀を以て取扱ふことの贊否如何に就ては、見る人の目によつていろ〳〵議論もあらうが、意義あり由緒ある靈岳は之を保護すると共に然るべき方途を講ずべきは當然なことであらうと存じます。

出羽の三山は羽黑修驗衆の開發努力によつて、一千年の傳統を保ち敬神崇祖の作興に盡したのであるが、明治維新以來道場の意義滅却し、修驗道は潰滅に瀕したのであつたが、現今島津傳道師の奮起によつて復興の途上にあり、又登山熱の勃興と敬神思想の普及につれ、古來の信仰再燃し登山參詣者雲集してをります。然し登山參詣の道理を心得て修行のための登山であると自覺してをる人が幾人あるかを想ふ時、甚だ以て遺憾に堪へぬ次第なのであります。

吾等の鄕土にも靈峯吾妻あり、湯殿山と同等な靈場を有ちながら、これを等閑に附して開發せず多年放任して顧みないといふことは甚だ遺憾なことであり、殊に由緒の史跡を湮滅せしむるのみならず登山旺盛の今日、種々なる角度より眺めて愛鄕士人の關心と考慮とを促したいと思ふて止まん次第であります。殊に由緒の靈山を單なるスキー場や遊園地としてのみ有名にすることは決して好

ましいことではあるまいと信じます。

今や内外多事多端、内にあつては國體觀念の明徴强化、外にありては支那事變は元より國際間の紛雜摩擦等、國家非常重大な秋であつて、何よりも先づ精神の昂揚と思想の善導を期して國民一致總動員を圖り、益々英氣を養はねばならぬ時であります。斯樣な觀點に立脚して特に鄉土青年の修養道場として吾妻の再興開發と適當な施設を希ふて止まんものであります。元より、昔さながらの山伏の再現を提唱して修驗道そのものゝために復興を主張せんとするが如き、消極的意圖を有するものではなく、山岳宗敎の精神を此の山に生かさんがために、昭和の時代に卽する方途を考究せんことを希望いたす次第なのであります。敢て所信の一端を披瀝するに止め、具体的な私見はこゝに述べないのでありますが、識者篤志者の一考を煩はし同感共鳴を得て意義ある開發が實現いたしましたならば鄉土のため誠に幸なりと存じます。

【七】 支那事變に鑑みて特に不動明王の信仰と山岳抖擻を强調す

：（一）：

あさみどり澄みわたりたる大空の
　廣きをおのが心ともがな

明治大帝がかやうに仰せられました如く、大自然を愛慕する日本國民は本來廣濶な明朗な平和の愛好者であります。然しながら若し一旦事ある時は、凛烈にして豪放なる武勇を發揮する天性と敎養とを有つ國民であります。

天皇は實に「天つ日つぎ」にまし〳〵て天意を地上に實現せらるゝのでありまして、天意は皇室の御寶であるところの三種の神器にあらはれたる智仁勇の三德であつて、佛敎の所謂智慧、慈悲、勇猛の三德と一致するのでありますが、吾等人民はこの天業を扶翼し奉らねばならぬ重大な義務を負つてをるのであります。

日本人は靑空の如き明朗さと、太陽の如く萬象を照らして餘蘊なき仁慈の德と、火の如き赫々たる叡智と、正義に對する勇武を兼ね具ふると共に進步發展して止まざる眞理の愛好者、體現者たることを心掛けねばならんのであります。

我國は過去三千年來、朝鮮、支那、印度、歐米等の文物を輸入し消化し、同化して文化發展の資糧となすことが出來たのも、本來眞理を追求して止まざる眞理の愛好者であり、而かも眞理に對する大なる抱擁性を有ち、咀嚼力を有つてをつたが故であつて、中でも佛敎は最も多く國民に寄與し其の文化發達に貢獻すると共に、佛敎それ自身も亦吾國に於て初めて最もよく社會に順應して其の精髓を輝かすことが出來たのであります。

印度に於て滅び支那に於て衰へた佛敎が、獨り我國に於て榮えてゐるのは佛敎の眞理性融和性にもよることながら、これを同化し融和し得たことは日本國民性の偉大さ優越さによると云はねばならんでせう。

・・(二)・・

佛教に對し認識を欠いた一部の人々の間には「諸行無常」の教理を厭世的消極思想と誤り、隱遁的退嬰思想と解し日本固有の精神と齟齬するかの如き觀方をした者もあるのでありますが、實は無常の世相なるが故にこそ新陳代謝し、變轉輪廻して止まらざるのが實相であり、然る故にこそ躍進もし廢退もするのが事實であつて、すべてが無轉變に停止したとしたならばそれこそ進展することなく寧ろ沒落への一途を辿つて廢退に歸するより外はないのであつて、更生も發展も創造も文化も恐らく覺束ないのであります。さればこそ迷夢に醉ひ獨善に誇り、獨斷に陷つて偷安を貪り、慢心に耽つて頑迷偏矯に停滯することは大禁物であつて、建國以來脈々として流れ來つた不斷に躍動する不退轉の力を培ひつゝ矛盾や不正を匡し、行きづまりや不安を打開克服して建國の大理想たる淨土建設の聖業のために國運の發展を期し、益々國力を伸張させて行くことが必要となるのであります。卽ち小我を捨てゝ大我に卽き、蒙を拓き邪を去り、煩惱を滅して轉迷開悟以て大和の境地に到達すれば所謂「寂滅爲樂」の理想世界出現となるのであります。

國運發展の源泉、國力伸張の元素は實に思想であり精神であり信念であつて、更生發展を期し伸張躍進を促すためには國民思想の涵養と啓發が大切であり、魂の教養といふことが第一義となることは申すまでもないのであります。

日本には古來世界無比の武士道といふ獨特な指導精神があつた、そしてこれによつて眞に人間として如何に生きねばならぬかを教へられて來たのである。それは克己の精神であり、努力の精神であり、滅私奉公の精神であり、無我犧牲の精神であり、報恩感謝の精神であるところの純粹善美なる一致協和の精神たる大和魂そのものを內容とする道德なのであります。

日本を以て好戰國となし、殖民地獲得の野心國と見做すが如きは世界淨化と大和融合を國是とする日本の理想を知らざる唯物僻見の誤解であつて、武といふ字を見ればよく解る如く、武士道とは◎戈を止める士の道、卽ち鬪爭や戰爭を止めしめて平和を實現せんための仁道であることが解るのであります。佛教の中でも不動明王や文殊菩薩、妙見菩薩などの諸佛が利劍を振りかざして居られる威容は、これ亦武士道と少しもかはらない平和攪亂者膺懲のシンボルでありまして、窮極の理想は絕對の大平和合の具現が目的となつてをるのであります。

然るに歐米の唯物的實利主義、功利的利己主義者の思想を多分に取り入れた明治の教育は、日本古來の指導精神を歪め鈍らして社會觀、道德觀、人生觀乃至國家觀、世界觀を如何に貧弱にし淺薄なる惡どいものとしたか。曾て思想國難が叫ばれ、今亦國民思想の總動員が强調せらるゝのも矛盾したる誤まれる教育の招來したる思想觀念の破綻と、行詰りに對する覺醒の要望であり、雄叫びであると觀て間違ひなからうと思ふのであります。

・・(三)・・

山岳を以て修錬の道場とする修驗道(しゅげんだう)の教風は艱難を克服し、苦痛を堪へ忍びながら剛健不屈の氣

力を發揮し、精進努力不動の信念を以て理想の高峯へと向上の一路を辿る修養であり、山伏は山武士なりとの異名もあつた位で、武士道精神そのものゝ修養道でもありますので、軍人宗であるとも云はれてをりますが、それには當然亦それに相應はしい信仰の對照があるのであります。それは日本精神の精髄たる大和魂の象徴であり、武士道の權化とも云ふべき不動明王そのものであつて、これを古來信仰指導の本尊と仰ぎ、道者その者は一生を通じて不動三昧に精進するのが建前となつてをつたのであります。

然らば不動明王とは全體何物であらうか。抑も不動明王とは丁重には大日大聖不動明王と普通申してをりますが、大日とは大日如來のことでありまして、不動尊は大日如來の使者でありますから首に大日と斷つたのであります。大聖とは聖者中の聖者なるが故に、その廣大無邊なる本誓功德を敬讃した言葉であり、不動とは眞淨菩提心を指した名稱であつて、煩惱に汚染し動搖せざる心なるが故に亦無動とも申します。又不動は不動にして而かも動なりで無碍自在、縱横無盡に活躍遍滿する精神なるが故に風動とも申します。明王とは無明を碎破し迷蒙を打開して一心明淨たらしむる威力自在なるが故に斯く申したのであります。

不動明王のお姿には地獄から佛界までの十界の全相が表示せられ、一々に亦十界が具つて融通無碍なる十界互具の佛敎の深意が現はされてありますから、ツマリお姿の中には佛敎の全敎理が織り込まれてをるのであります。

「明王何人ぞ己心本覺の如來なり」と興敎大師は釋されたが、經の中にも「たゞ衆生心想の中に住

し玉ふ」とあります如く、不動明王それ自身は、實際お互の心魂の中に居住してをられるのであつて、この魂の中からうつし出し繪がき出して木像や繪像が現はれ不動尊のお姿といふものが出來上つたのであります。

恰度、大和魂何ものぞと反問してみたところ、一口に說明不可能だから偉人傑士を拉し來り、斯くの如き人こそ大和魂の權化であり持主であるぞと、人物や手本を示して納得せしむると同樣、木像金佛は皆信仰上の軌範たるべきもの、よすがたるべきものでありまして、畢竟精神上の象徴物であつて、決して單なる偶像ではないのであります。

伊達正宗が幼少の折、供に連れられて不動明王の尊像を拜した時「こは何者ぞ」と不審がられたので、恐ろしい姿はしてをりますが內心は慈悲に滿ちた不動明王と申す佛でありますと從者が說明して聽かすと「武士たる者こそ斯くあらねばならぬ」と申されたと云ひ傳へられてをるが、流石は正宗であつたと感心すると共に、正宗の心の中には常に不動明王が往來してをつたと信ずることが出來るのであります。

：（四）：

よもの海皆はらからと思ふ世に
　　など波風のたちさわぐらん

明治大帝がかくも御なげき遊ばされたことでありますが、遺憾ながら東亞の大陸に大風雲が卷き

起り、忠勇なる吾皇軍將兵は意氣揚々敵を制壓して今や世界戰史上空前の壯途に歩武を印しつゝあります。

太陽を國旗と仰ぐ我大日本は、太陽の德を本誓とする大日如來のやうな大慈悲に燃えつゝ迷闇に光を惠むと共に何物をもうつし出して餘蘊なき鏡の如き大圓滿を國是とする國柄であつて、日本を措いては何れの國も東亞の盟主たるの資格を備へず、而かも民族愛人類愛の精神を發揮して人類の聖業を實現し得る國家はないのであります。されば こそ友邦支那に對し、恰かも親が子に諭すが如く共に手を握つて東洋の平和を圖り、共存共榮の樂土を築つかうと繰り返し々々如何に諭し聽かしたことであらう。然るにも關らず迷蒙難化の支那當局は以夷制夷の手段を弄して吾れに反抗を續け隱忍すればする程、圖に乘つて侮日抗日の暴慢無禮、理想實現の邪魔をする、どうしても慈悲の膺懲を加へなければ目が覺めない。そこで反省自覺を喚び起さしむべく、一面に於ては自衛のため、他面に於ては理想實現のため東洋平和の礎石となつて北支、中支、南支の支那大陸に惡魔退治に血まみれとなつて闘つた忠勇無雙の吾皇軍將士の一死報國の信念が卽ち不動明王の精神そのものゝ活現なのであります。

強剛難化の衆生を折伏せんとて、滿身悲憤に燃えながら平和のシンボルたる涅槃寂靜の蓮華の高座より下り跣足のまゝで盤石の上に突立ち上り、一大決心を示したのが不動尊の姿であります。憂ふればこそ慨し愛すればこそ怒るのが不動尊のみ心なのであります。

萬世一系皇統連綿たる大日本の衛りとなり、民族愛、人類愛の前線に出動し肉彈となつて砲火を

潜り水に浸つて水火猶ほ辭せず奮闘をつゞけ敵兵を追ひまくつた皇軍將士の如く、背後は火炎に包まれ足下には波浪押し寄せ來るも泰然自若、一刀兩斷にたゝき切らうと降魔の利劍を振りかざし惡魔を睥睨して居るのが不動尊の姿であります。

暴戾の支那兵を憎みながらも無辜の人民を勞はり或は綏撫し、はては自己の危險を冒して愛馬の死を悼むなど涙組ましき數々の人情美談を戰線に繪がき出して、聞く人々の胸を打つた情けある皇軍將兵の如く心を憎んで人を憎まず、額に憂愁の皺をたゞよはせ、心に憐愍の涙を流してをるのが不動尊の姿であります。怨敵碎破の刄のかげにも大悲愛護の涙ある緣の綱を用意してをる慈悲の權化であります。

全身を青黑二彩にぬりつぶした空風二大の色の裏には、堅固不動の折伏の悲念と、生々化育の攝護の慈念を充實し、口先外交や戯論に耳を假さず、慷慨悲憤の緘口一文字の內にも上下二本の牙齒を表はして上求菩提、下化衆生の協力握手と慈悲哀愍を忘れぬ情けの意圖を示し、一眼を閉ぢて煩惱を遮し一眼を開いて菩提を成ぜんことを專念し頂髮を七莎髻と申して七ヶ所に結んで左肩に垂れ七生報國を叫んで散華と散れる大楠公や廣瀨中佐の如く、七代までもと盡忠の至誠と一子愛護の慈心を誓つてをるのであります。而かも亦頂上には無上菩提の蓮花の台座を戴いて一切衆生を大日如來の平和の樂土へ引導せんとの大使命を覺悟用意してをるのであります。大日如來の平和の樂土とは悲智圓滿、佛心一如、神人一體となれる自他和合の淨土あり、萬邦協和の極樂世界を指すのであります。

「父は打つ母は抱いて悲しむを、たがふ心と子は思ふらん」てふ歌の如く腕白小僧を懲す父の心が不動尊の心なのであります。自分自身は裸洗足のまゝ苦心苦勞を厭はず、而かも多くの人々を淨き樂しき蓮華のうてなに載せやうと憐愍苦闘する不動明王の精神を勿体なく思ふと共に、君のため國のため人類のため、平和の礎石となつて奮戰苦闘、身命を捧げた皇軍將士盡忠報國、一身犧牲の散華布施行爲に感謝感激の涙がこぼれるのであります。

大元帥陛下の大御心を奉體し、平和克復と理想實現を胸に秘めながら降魔の陣頭に立つ日本軍人の精神と、大日如來の使者となつて惡魔降伏の利劍を振ふ不動明王の精神は、冥契照應して敢て少しもかはらないのでありまして、不動の信念を通して　陛下の御稜威を仰ぐところに日本精神の眞髓があるのであります。

(五)

宇宙は住むべく生くべく人間の共存に與へられたる天與の賜であつて、天則にのつとり正しく平和に樂しく生きんとする者を拒否する謂はれはないのである。

日本は利慾や私慾のために他を排除して、領土や利權の占有獲得を目的に戰爭をしたのではない。協和卽ち佛法の和合衆を目的として、まつろはぬ者をまつろはすべく正義のため、人類愛のために止むに止まれず戰つたのであります。膺懲のため覺醒喚起のための降伏であつて、征伏のための戰爭ではなかつた。生命共存の保證を得るのが日本の願求であつて、決して國土の侵略ではなくて國

土の開放が目的であるのであります。

吾等は搾取と暴壓に宿命づけられて、虐げられた文化なき支那土民を闇から救ふて光明を與へ、共存共榮の悅樂を共にせんため卽ち佛法の上求菩提、下化衆生の菩薩道實踐のために義戰を敢てしたのだといふことをハツキリと認識しなければならんのであります。

不動明王の降伏の劍は善人を殺さん爲の劍ではない。惡人を更生させん爲の活人劍であります。

誰か云ふ、宗教は敎であつて實行ではないと。元より宗敎そのものは敎ではある。然し人間は敎ひの體現者であり、實踐者であらねばならんのであります。殺生は亦佛敎の重大な禁戒の一ッではある。然しながら、それは私慾や私情の上のことであつて、大乘般若の第一義空諦に於ては正に之を超越してをるのであります。

毒蛇來つて將に吾れを呑まんとす、殺生は佛法の禁戒なりとして怡々諸々吾れ毒蛇の餌食とならば却つて毒蛇のために殺生を許して吾が罪輕からずと云はねばならんのでありまして、佛法に慈悲の調伏を說く所以はこゝにあるのであります。

法を布かんために蠻國に入り、蠻人の刃にかゝつて從容最期を遂げた富留那尊者を自已を滅却した忍辱の手本として稱揚はするが、それは慈悲救濟の一方法であつて、慈悲の方便や救濟の手段は範圍が廣いのであります。慈悲柔和な地藏尊でさへ惡魔の跳梁を制するには、勝軍地藏と變じ軍神となることもあるのであります。聖無動陀羅尼經にある如く「如來或は慈體を現じ或は忿怒を現じ衆生を敎化すること各々不同にして衆生の心に隨つて利益をなし玉ふ。魔軍を破すと雖も後には法樂

を與へ忿怒を現ずと雖も內心は慈悲なり」で佛法の降伏と救濟は窮極に於て一致するのであります。

今度の日支關係に於て之を見るに、排日侮日抗日を繰り返し如何に親善の手を差し延べても、これをヲリ離し而かも道義を蹂躙して無辜の同胞に迫害を加ひ、暴慢非理を增長し來つた支那當局である。こゝで一度膺懲を加へて反抗心を打破せねば將來の東亞の平和、大道の發揚に障害を來すのであると敢然として降魔の利劍をひつ提げて立つたのが我國の姿なのであります。殺すために戰つたのではない、活かすために——ほんとうに活かすために戰つたのであります。殺戮に非ずして更生であり征伐に非ずして膺懲にあるのでありまして、聖戰と云はるゝのはこの故であります。これこそ日本人の胸に宿る不動明王の本誓悲願そのものであつて、而かも亦高きを仰ぎながら忍苦精進現實に立脚して堅忍不拔、幾多の難關を突破して理想の峯へと登り行く修驗の風格そのものであり眞の大道を現世に顯現せんとする大乘佛敎の實踐と一致するのであります。

不動明王の瞋りは、私情や私慾に基く小我のいかりではない。元來佛敎に於ては瞋恚と貪慾と愚痴の三つを三毒として戒めてある。然しそれは私怒、私慾、私痴を指すのであつて、小我を離れ私情私慾を去つた公憤、公慾、公痴は大我に歸すべきものであつて、大なる公の瞋恚は既にいかりではなくて正義に對する大なる勇氣であり、大なる公の貪慾は既に貪慾ではなく大なる救濟の慈悲であり、大なる公の愚痴は既に愚痴ではなくて暗愚を照す大なる智慧として現はれるのであります。

この勇氣と慈悲と智慧こそは不動明王の全身にみなぎる精神であつて、取りも直さず吾等日本人の精神であらねばならんのであります。

吾等は天地の大道たる皇道を四海に宣揚せんとする吾國の存立と兩立し難い容共抗日の意志を根本的に、而かも徹底的に粉碎して東亞の平安を永遠に求めんために膺懲の威力を振はなければならんのであります。この威力こそは迷蒙支那に光を與ふる活人劍であり、同時に東洋を活かし、やがては世界をも光被すべき降魔の劍でなければならんのであります。

吾等は一體となりて民族愛の破壞者であり、人類平和の攪亂者たる容共抗日の支那當局を膺懲する正義の聖戰のために、銃後の陣營に加はると共に事變の眞相を認識し、吾等の理想を宣明して將來のために益々緊褌一番愈々兜の緒を締めて精進努力を怠つてはならんのであります。

× × ×

吾妻山は不動明王の化身（けしん）たる役（えん）の行者神變大菩薩の開踏された忍苦精進の修養の道場であり、吾妻大權現は不動明王の本地たる大日如來の法身佛の靈體として殊には日本武尊御東征の聖蹟として其本地の靈を祀つた靈域としても傳へられてをります。

感謝感激に禁へざる忠勇無双の我皇軍の奮鬪により、今や首都南京は陷落し、抗日の本尊蔣介石は自業自得自ら墓穴を掘らんとしてをるのであります。然しながら吾等は眼前の戰捷に陶醉して決して油斷は出來ないのであります。必ずや近き將來に於て更に苦き經驗を繰り返さねばならぬことを誓つて覺悟せねばならぬ。そして吾等の周圍には耽々たる無道の猛虎が、隙あれかしと狙ひつゝある形勢に鑑みるとき、堅忍持久獅子の如く毅然たる態度を以て將來に備へねばならぬと共に惡魔降伏の悲願に燃えたつ不動明王を吾等の丹田に安置して、愈々その冥感を念じて信念を强め、益々

護國精神の昂揚發揮に努めねばならぬは勿論、登山の季節來らば明王有緣の勝地靈峯吾妻の殿堂を包む神秘の靈氣に六根を淨化して忍苦の法悅に浴し、以て向上の一路を辿らんことを多くの登山者に祈つて止まざる次第であります。（此の稿南京落城の折誌す）

修驗道山伏の研究資料に就て

修驗道山伏の研究資料其他に關し述者宛たま〳〵全國各地から照會に接しますので、御參考のため茲に一寸左記いたします。

古來事相方面の秘軌類は全く師資相傳によつたので、一般に公開はなかつたが、教相方面の版行物は可なりあつたのである。然し今日一部となつて纏つたものはまだ出てをらぬのであります。然し群書類聚の中には多少入つてをる筈であり、殊に大正九年頃完成された日本大藏經の中には修驗道章疏となつて三部の中に大體の教軌類は編纂されてあります。明治初年故人海浦義觀師の著はされたもの、私が大正七年公にしたものは絕版のまゝになつてをります。醍醐派某師の記述たる「修驗摘要記」と云ふ簡單なもの及び近年牛窪弘善師の著述にかゝる「文化史上に於ける役行者」が單行本として目下出てをりますのが關の山でせう。其外宇野圓空師の書かれた小冊子も見えるやうであるが、教義に關する一般向きな手頃のものはまだ出てゐないのであります。現在、月刊雜誌として三種程出てをるが、その中には參考になる文書が掲載されて貴重な資料を提供してをるやうであります。又大學の卒業論文などにもチヨイ〳〵研究論文が見えるやうであるから將來は一寸纏つた著書も現はれることでせう。

佛教殊に天台眞言の顯密の教理に闇くては斯道の奥義は解せられず、特に事相方面の師資相傳や口傳口訣の秘密相承なくては、肝心な秘奥は全々了解し得られず、而かも已達行者に非ずんば傳ふるも甲斐なき事柄が多いので仲々難澁な法門でありますから日本でも奥義を傳へてをる人はそんなに澤山はないのであります。

附錄

吾妻山脈中の溫泉

吾妻山は現在休止してはゐるが、近年まで濛々と噴煙を揚げてをつた火山脈である。從つて山脈至るところ溫泉に惠まれてをる。

登山者の中には湯治を純然たる目的とするもの以外、探勝や遊樂を目的とするもの、學術研究や運動を目的とするもの、或は亦たまに參詣を主眼とするもの等種々あらうけれども、登山者にとつて湯治は一つの愉悅でもあり、同時に憧れの一つの的でもある。

敬虔的山であつた吾妻の道場を、信仰の山としての古來の歷史や傳統を忘却して、單に近代的遊園地としてのみ眺めることの失當さは勿論のこと、これが開發に就ても時代の趨向に鑑み、いろ〳〵考へさせられることであるが、何れにせよ大衆吸誘上この山のもつ一つの强味は溫泉場の豊富なる點であらうと思ふ。全國で有名な山々を調べても解ることであるが、登山口の何れの方面を見てもかくも多くの湯治場を有つてをる高山は殆んど稀れであります。

簡單ながら山中の有名な溫泉場の案內記を附錄として茲に揭げたのも、主として吾妻奥之院を中心とする登山者の便宜を考へたからのことであるが、吾妻權現靈場を志す登山者に特に注意を要する點は、地理に明るい案內者なくては現在のところまだ危險であるといふことを御承知願ひたいの

である。

山中の溫泉場は米澤方面に於ては勿論、會津方面にも登山口に當る湯治場がまだあるのであるが追つて別版發行の折、委細掲載の意向であります。

◎土湯溫泉〔所在地　信夫郡土湯村〕

吾妻小富士の南方中腹、海拔六百七十米突の高地、翠巒重疊として迫る荒川の溪流を挾んで十數軒の旅館と數十戸の商店や農家によつて溫泉街をなした仙境である。吾妻山中では最も早く拓けた溫泉場で、舊幕時代は會津街道の主要驛であつたが、度々火災や事變に遇つて往時の面影を失ひ、交通機關の發達につれて漸次衰退したが、近年復興以來は全く面目を一新するに至つたと共に近く開通せんとする會津新街道が竣功したならば、一層浴客や登山客で賑ふことであらう。泉質は單純泉、塩類泉、炭酸泉といろ〳〵あり、リウマチス、中風、婦人病、胃腸病、神經痛、胎毒、瘡、半身不隨症、皮膚病、腺病質等に効能あり。近代的建物として山紫水明な自然の風致とよく調和した明るい氣分のする溫泉場で、附近には姫鱒飼育場として知られてをる女沼、男沼、其外思の瀧外五六の瀧もあり、源義家が阿部貞任、宗任兄弟と戰つた陣場と稱する古戰場、明治戊辰の役に會津藩士と官軍と刄を交へた小峠の古戰場、また東吾妻の山麓には宗任の城趾と傳へらるゝ舊蹟もある。

溫泉の上部に興德寺といふ臨濟宗の寺があつて境内に太子堂、愛宕堂、湯神堂の三堂宇あり。太子堂は最も古く、傳說によると推古天皇の御代諸國に國分寺造營の砌、東國に下向を命ぜられた秦野川勝が奉持し來れる聖德太子御自作尊像の靈夢によつて溫泉に浴し病癒え靈告により、この尊像

をこの地に祀つたと傳へられ居り、亦堂内には姥神の古像も祀られてある。この姥神像は元、吾妻登山水原村口に祀られてあつたが、明治維新の戰亂で堂宇燒失のため、こゝに合祀したものなさうである。

宿泊料の比較的安いこと、設備の相當なること、旅客の收容力のあること、交通の便利なること風光明媚なること、保養地としも團体宿泊浴場としても誠に適當な溫泉場である。

東北本線、松川驛より四里、金谷川驛より三里、福島驛より四里あり、各驛より自動車の便あり殊に福島驛からはバスも頻繁に通つて居るし、會津猪苗代と福島を結ぶ新街道が出來上れば一層頻繁さを加ふべく、この沿道には鬼面山上層に近く野地溫泉、鷲倉溫泉あり、會津方面に下れば途中に横向溫泉あり、遙か下つて中ノ澤溫泉、沼尻溫泉等あり、眺望絶佳な街道筋であつてハイキングコースには最も適當してゐる。

この溫泉場から吾妻に登山するには約二里半にして直接小富士の麓に出る近道と幕川溫泉を通り約四里にして東吾妻の麓であり、一切經と小富士との間にある元噴火口のあたりに出る道と二線ある。前者は急坂で後者は樂な登り道である。信夫、伊達、安達方面からの吾妻權現參道登山口としては最も早くから開け、曾てその昔修驗者の宿坊も六院あつた點、附近には修驗道と最も關係深かつた熊野山を祀つてある點等から見るも、相當賑つた登山口であつたことは想像に難くない。

旅館には富士屋、木村屋、いますや、扇屋、つたや、山根屋、岩城屋、向瀧旅館等あり。

◎不動湯溫泉

土湯より僅か上つたところにあり。

◎川上溫泉

土湯より約半里荒川淵を上つたところにあり。

◎幕川溫泉

土湯から約三里垣々たるトロ登りの林道を幕川に沿ふて登り、東吾妻の東南麓に位する高地の凹みにあり、こゝより小富士まで一里數丁、閑靜な溫泉地で旅館は二軒あり。附近に幕瀧あり野地、鷲倉の溫泉に通ずる道もあり、交通不便な山谷の地なれど登山者の旅舍としては好都合な場所にある。

◎新幕川溫泉

幕川溫泉と野地溫泉との中間にあり、近年開設の溫泉である。

◎野地溫泉

土湯から二里上つた鬼面山の上層部會津街道筋にあり、吾妻山方面一体の山系は一望の裡に收められ、亦福島市一帶が遙かに展開される雄大な眺望を有つてゐる場所である。

◎鷲倉溫泉

野地から二三丁街道を廻つた沿道筋にあり間歇溫泉として有名である。この地から僅かに廻れば會津耶麻郡部となるが、この邊からは裏磐梯山や中西の吾妻も見え、脚下には横向溫泉を眺め、沼尻方面も指呼の裡にあり、晴々とした氣持の佳い眺めである。

以上の各溫泉は泉質の異なるに從ひ醫治効能も自ら異なるが、前に列擧した以外幕川、野地、鷲倉の溫泉は胃腸病に効能ありとせられてをる。

◎信夫高湯溫泉〔所在地　信夫郡庭坂村〕

吾妻一切經の中腹、海拔二、六〇〇尺の高地にあり、開創以來三百有餘年を經た塩類性硫黄泉であつてリウマチス、慢性皮膚病、脚氣神經諸病、梅毒、火傷、胃腸病等に効能あり。山の湯としては野地や鷲倉などゝ同じく高燥地にあつて、眼界の眺望も良く避暑所としてもよい。安達屋、信夫屋、吾妻屋の三旅館あり。

◎玉子湯溫泉〔所在地　前と同じ〕

前項、高湯溫泉の僅か數丁下に當り道路筋にあり。泉質には稍や相違はあるが効能は高湯と大体異ならず、唯高湯が見晴しのよい高所にあると反對に、こゝは環境極めて幽邃で靜養向の溫泉場である。

高湯、玉子湯は吾妻山の一ッの登山口として殊に一切經への登り口として知られてをる。一切經頂上まで約二里半、谷地平まで約四里、吾妻權現道場まで約六里と稱せられてをるが、四月頃の積雪を踏んで行けば高湯から日歸りの參詣も出來るが案内なくしては危險である。

奥羽本線庭坂驛から二里半、自動車の便もあり、又福島市からは四里半あり、直通乘合自動車が通つてをるから頗る便宜である。

◎微湯溫泉〔所在地　信夫郡水保村〕

吾妻小富士の東北森林帶の靜寂幽邃な山狹に位し、小富士までは約一里半の距離にあり。名の如き、ぬる湯にして眼病には特効ありとせられ、此方面の滯留浴客が多い。吾妻一切經、小富士方面への登山口としては庭塚村姥堂より此溫泉に差しかゝる登山道が最も樂な登り道である。小富士の南麓桶沼近くにある吾妻小屋は鐵道省の建設にかゝるスキー客の避難宿泊所であるが、夏季の登山客も扱ふので頗る便宜である。然し三十人以上は宿泊困難である。現在微湯溫泉に於て經營に任じ客を扱つてをる。庭坂より微湯迄は約三里半、福島よりは約五里半、共に自動車の便はあるがまだ乘合はない。然し福島から高湯行の乘合に乘れば姥堂にて下車し、それから約三里、坦々たる街道を登れば此地に到着することが出來る。

◎信夫溫泉〔所在地　信夫郡庭塚村〕

昭和十二年に出來上つた新開設の會社組織の經營に係る溫泉である。高湯街道筋に當り高湯まで一里半あり。炭酸泉だが湯がヌルいので電氣で沸かしてをる。靜寂な峽谷にあつて夏向きな避暑地として適當な溫泉場である。

◎五色溫泉〔所在地　山形縣南置賜郡山上村〕

奥羽本線板谷驛から約一里、海拔三、〇〇〇尺の眺望に特色を有つ高地にあり。婦人病、慢性諸症、腺病、脊髓ろう病、歇私的里、官能性神經疾患、慢性濕疹、慢性關節、リウマチス等に効能あり。元五色湯は單純泉、新五色湯はアルカリ性炭酸泉である。スキー場としては全國的に有名である。此の溫泉から一切經に通ずる登山道は、途中青木小屋を經て家形山の東北中麓に出で五色沼を登り約三里にして頂上に達する。

旅館には元五色に宗川旅館、新五色に佐藤館、子金屋の三軒あり。

◎中ノ澤溫泉〔所在地　耶麻郡吾妻村〕

◎沼尻溫泉〔右と同じ〕

磐越西線川桁驛から耶麻軌道に乘替へ磐梯山と安達太良山との中間盆地を上れば沼尻驛に着く。海拔三、〇〇〇尺の高地で、中ノ澤と沼尻の二湯に分れ、スキー場としても有名である。硫黄鑛山も遙か上に見え雄大な眺望を有つ溫泉境である。附近の姫沼湖を利用して遊園地も出來てをり、夏季にはキャンプ村なども出來避暑地としても良い。

◎横向溫泉〔所在地前と同じ〕

沼尻から約一里半鬼面山へと登る會津福島新街道の道筋にあり幽邃な溫泉境である。乘合の便もある。

以上の三溫泉場は酸性硫黄泉又は含鐵炭酸泉に屬し慢性胃腸病、皮膚病、創傷、火傷、婦人諸病神經系諸症に効能あり。

沼尻達澤の道路は昔田村、安積郡方面への通路であり、吾妻登山口でもあつたが、現在は鐵道や軌道の便によつて木地小屋に下車し、吾妻權現へ登るを順路とす。又沼尻驛から新街道を自動車の便により野地溫泉に登り、それから徒歩にて幕川溫泉に出で東吾妻から一切經に出るコースもある中ノ澤には八軒の旅館あり沼尻には二軒、横向にも二軒の溫泉宿あり、沼尻附近には八幡太郎や戊

辰役の古戰場もあり、不動尊を祀り元吾妻登山木戸口行場であつた瀧などもあつて舊蹟も少くはない。

◎此外山形縣南置賜郡山上村に滑川溫泉、姥湯、南原村に吾妻溫泉、高湯、新高湯等の溫泉場があつて吾妻權現行きの登山道筋に當つてをるのである。

昭和十三年四月十日印刷
昭和十三年四月十五日發行

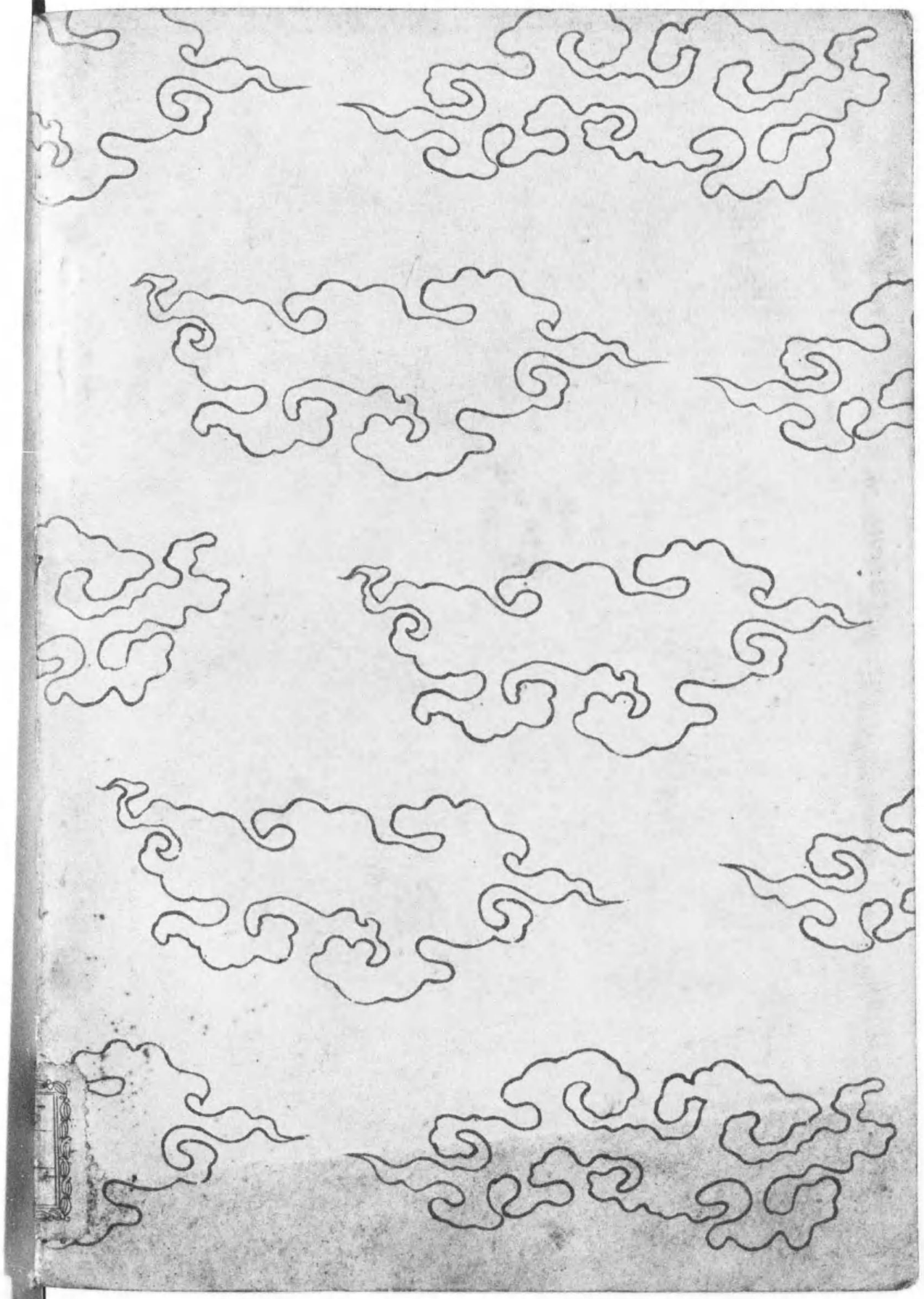
定價金五拾錢
送料金六錢

福島縣信夫郡渡利村八幡院內
述者兼發行者　三井豐興

福島市大町二十八番地
印刷者　木村玉次郎

福島市大町二十八番地
印刷所　木村印刷所

複製不許

發行所　福島縣信夫郡渡利村
小午田山八幡院
振替口座仙台四七〇二番

終